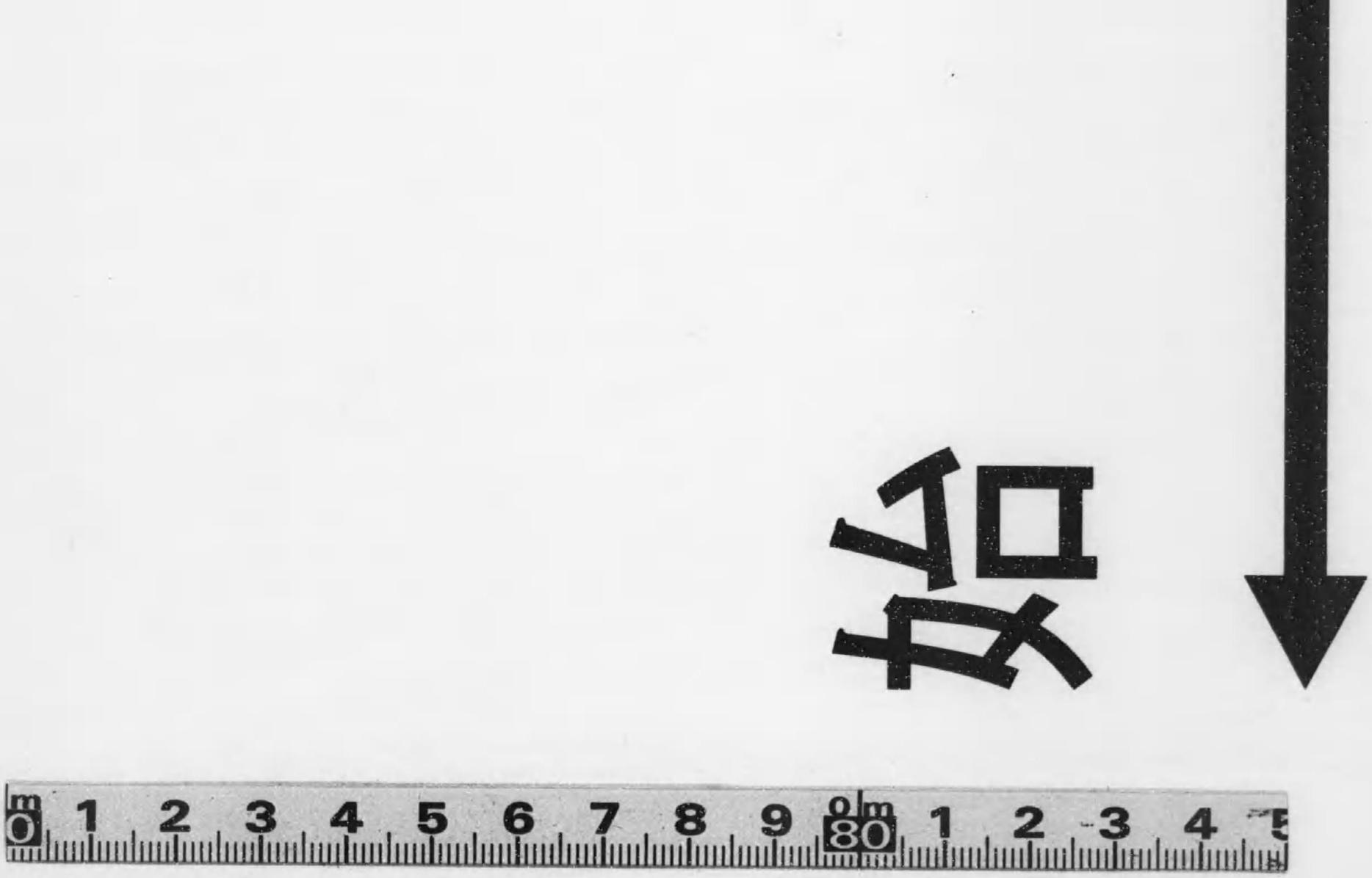
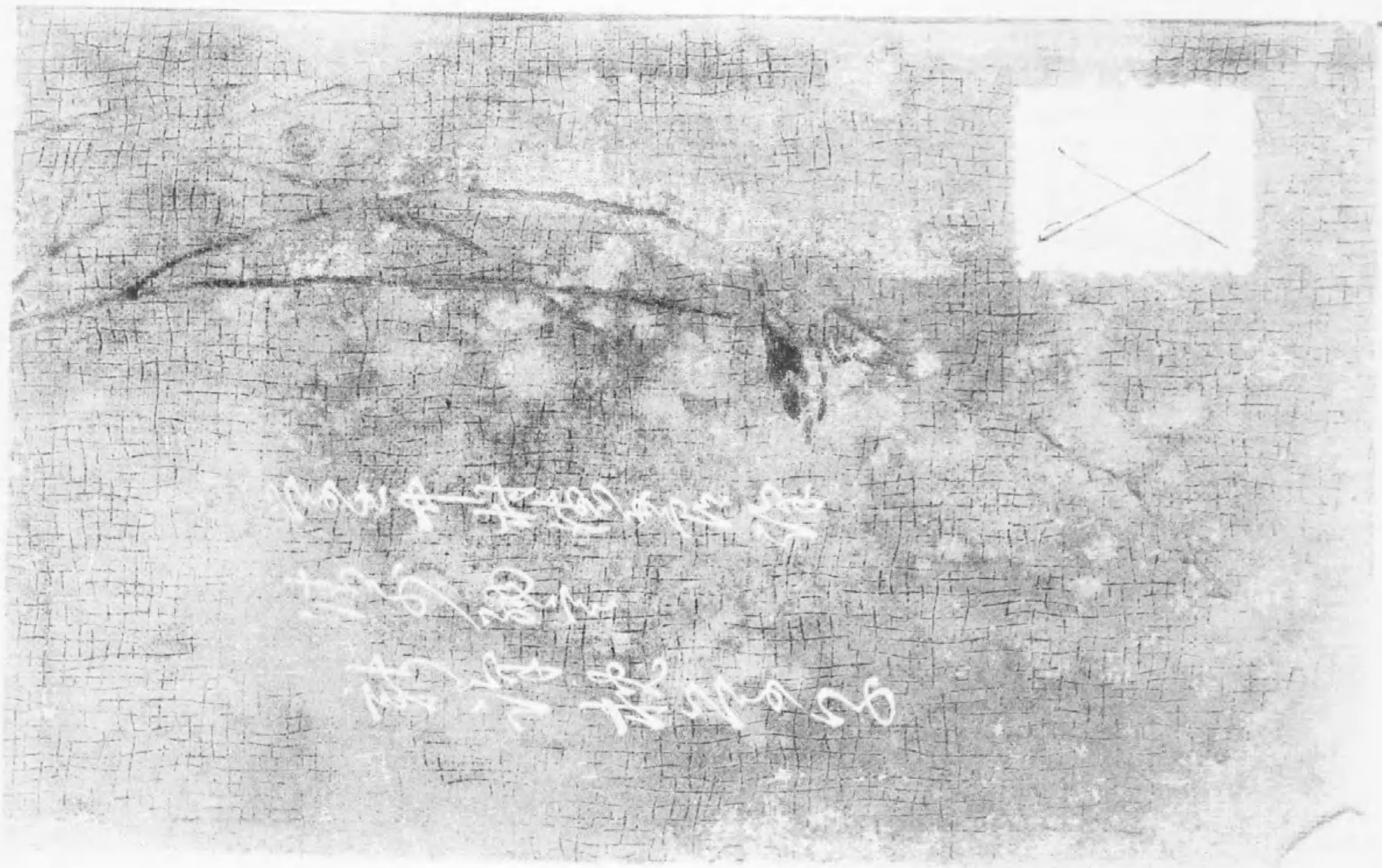

270
625



清少納言

# 新譯枕草子

文學士

中村德五郎譯

1.12.18.
內交

東京 文陽堂・松雲堂 大阪

# 序

枕草子は、一條天皇の御世、禁中に其人ありと知られたる、當代有數の才媛清少納言が、唯だ心ひとつに思ふ事を、戯れに書きつけたりと、自からも言ふなる隨筆なり。

天暦中、肥後守清原元輔、勅命を畏みて、後撰和歌集の撰者と爲り、大中臣能宣、源順、紀時文、坂上望城と共に、梨壺の五人と稱せられ、稀世の歌人として、其の名後代に傳へらる。納言は即ち其の

女にして、擢でられて一條皇后宮に奉侍し、上薦の次席に列して、其の官少納言たり。之を以て人皆其の名を呼ばず、姓清原の清字を冠して、常に清少納言と稱す。秀才博識、詞藻豊麗、最も歌文に長じ、又た能く和漢の學に通じ、自から隱然として、重きを女官の間に爲せり。

されば皇后の寵遇殊に深く、信任最も厚を加へ、時に畏くも天顏に咫尺し奉り、屢次忝くも優詔を面にし、斯くて上卿宰相と兄妹相交はり、卑官



下司と主僕相接し、六位の藏人の如きは、唯だ夫れ兢々として、納言の一盻を畏み、飛鳥も其の睨視の爲めに落ち、走獸も其の指顧の爲めに倒れんとす。洵に稀有の榮譽を一身に荷ひて、勢威隆々顯官を凌ぐさへあるに、更に又た内侍に進められんとするの議あるを見る、當時納言の得意、將た何物にか比するを得む。

遮莫、花の春に遇ふものは、紅紫の嬋娟を恣にし、月の秋に澄める時は、山河千里に隈なく輝くと

雖も、さても榮枯は人を待たず、盛衰は時を擇ばずして、夜半の嵐に花を散らし、憂き叢雲に影を隱せば、俄に變る落寞蕭條、偏に有爲轉變の歎に咽びて、昨の盛觀は、今將た悲愁の裡に閉さるゝぞ、是非もなし。　吁嗟世に時めける清少納言、亦た終に此の歎を免るべからざるを奈何せん。

そも關白道隆卿は、一條皇后の御生父に在しませば、卿が在世の間は、其の親近緣者を問はず、苟も卿を中心とせる圈内の人々は、或は失意の地



に沈淪して、轗軻不遇を嘶つ者、毫も之れあるなく、皆各其の所を得て、龍蛇天に冲するの勢ありしも、一朝不幸にして、卿の薨去あるに至りては、固より兄弟牆に鬩げる御堂關白の、俄に募る專横は、澹りに上下貴賤を抑壓し、已に媚びざる者は之を貶け、己が圈外に屬する者は之を免黜し、終に内大臣藤原伊周卿等の遠流の事あり、又た上東門院の入内ありて、中宮に立たせ給ひしなど、枚擧するに遑なく、今は皇后宮の女官も、亦た

皆涙の袖の乾く暇さへなきに、頃は長徳二年十二月、嚴冬の風は肌に砭して、北山颪に氷柱結べる禁庭は、尚も悲愁の雲に閉され、嗚咽の聲の漏れ聞ゆるさへあるは、哀れ皇后の宮の、今しも歸らぬ黄泉に旅立たせ給へりしなり。

あゝ狂風一陣、颯として燈火を滅し、神代の昔、岩戸隱れの夫れならねど、雲井の上はさながらに、暗中摸索の有樣にて、さしも時めきたる納言を始め、御側近く侍りたりし女房達は、一時に流離



四散の慘を極め、俄に變る憂き苦勞、昨日の榮華は盧生の夢、今ぞ寄る邊なぎさの捨小舟、漕ぎ行く舵も斷に果てゝ、指す先さへも白浪の、荒磯つゞく浮世岸、辿らん術もなく〳〵に、底ひも知らぬ渡津海の、藻屑となるも哀れかな。　木より落ちたる猿には、復た攀ぢ登る術こそあらめ、脚を雲井に蹈み外し、知らぬ奈落に沈みては、其の底深み常闇の、將た何處にか光明を認め得べきぞ。されば、こそ才識無比の納言にして、尚ほ且つ見

る影もなき佗住居すれば、
跡もなく雪ふる里は荒にけり
いづれ昔の垣根なるらん

と、赤染衛門が詠み遺りけんも、げに然る事ぞかし。想ひ起す當年榮華の夢、今は雨漏る茅屋の中、轉、人生の悲愴を感じて、飛ぶ鳥落す昔を慕ふらん。後には四國に流涙して、具さに辛酸を嘗めたりとも傳へらるれど、そは確かに知る由もなし。兎まれ老後の落魄は、察するに餘りある



事ながら、再び歸洛して落髮し、身を墨染の衣に纏ひて誓願寺に入り、脫俗持戒、ひたすら心界の光明を辿りて、芽出たき大往生を遂げたりと言へば、形而上と形而下と、其の得失未だ容易く論ずべからずして、才媛の末路、必ずしも悲風蕭條の歎を發するなくして可ならん乎。其の才筆に成れる本書の如きは、蓋し又た得易からざるの文範なり。

然れども、物變り星移るの間、原文或は誤寫の爲

めに轉置せられ、前段後段、章節字句、互に交錯雜亂して、到底考訂整齊し得ざるものなきに非ず。之を以て、天文五年の古鈔本、安貞二年耄及愚翁の奥書ある中古本。清原宮内卿の奥書ある堺本、群書類聚に見ゆるは全段を載せざれど、萬歳抄、活字本、清水濱臣の校合本、黑川春村の校合本、北村季吟の春曙抄、鈴木弘恭の訂正增補など、異本頗る多く、契沖阿闍梨、加藤盤齋、石原正明、橘千蔭、黑川眞頼等の考説も、亦た枚擧するに遑あらざれど、予は專ら季吟の春曙抄を基とせる鈴木弘恭の增補本に依りて、烏許がましくも重修を加へて新譯し、若し夫れ記事の猥褻に亘るものゝ如きは、往々にして省略削除し、未だ堂に上らざる者の爲めに、豫め圃に墻するに柳を以てするの婆心を用ひたり。　其の重修の諸點に至りては、各段細註を加へ、或は之を加へざるものゝ雖も、皆採て以て凡例に掲げ示せり。　唯だ其の微にして、示すに煩なるものは、暫く讀者の厭怠を

避く。蓋し其の章句を追ふの間、讀者自から修正の跡を見ざらんと欲すと雖も得べからざればなり。

そも本書に題して『枕草子』と言ふは、固より筆者清少納言の命名したる所にあらず。將た又た其の當時に於ては、世人は之を『清少納言の記』、若くは單に『清少納言』と唱へたりしは、諸書に散見する所なりと雖も、之を枕草子と言ふに至りし所以のものは、『上の御前には、史



記といふ文を、かゝせ給へるなど、のたまはせしを枕にこそはし侍らめと申しゝかば、さはえよとて給はせたりしを』と、納言自から本書の末段に書き記るせるを採りて、後人の題名としたるは言はでもの事なるが、さて此の『枕にこそはし侍らめ』この解釋に關しては、諸説まちまちなれど、中にも稍重きを爲すもの四説あり。

一に曰く、枕は人の常に手にするものなれば、此の草子も亦た枕の、如く坐右に離すべからざる

良書なり。　二に曰く、本書の毎段『ことゞな
るもの』『めでたきもの』など、其の本文の枕詞
を記るされたれば、則ち採て命名したるものな
り。　三に曰く、枕は男女の秘事に喩へらる、而し
て本書は、當時上流の秘事を穿ちて妙を得たり。
閨室の内、低聲に讀まざるべからざるもの、往々
にして之れあるを見る。　故に名づくるに此の
義を以てす。　四に曰く、枕は夜の物なり、即ち人
に秘せざるべからず。　今此の隨筆、固より人に



見すべき程の仰々しきものにあらねば、史記な
どの如き公の正史にはあらで、唯だ戯れ書きの
私言に過ぎずと、納言自から謙遜したる末段の
語句を採るものなりと。　想ふに第四説は、最も
穩當にして、筆者納言も亦た其の意を得たるを
首肯すべけん也。　若し夫れ草子、草紙、双紙、冊子
などゝ書きて、未だ一定する所なきは、蓋し其の
意義の、草案、草稿なるに於て、共通するに依り、清
書をもしあへずと言ふの心同じければ、必ずし

も文字の異同を論ぜずして可なればなり。

さても此の草子は、才媛の才筆に成り、源氏物語と共に、古今文壇の双璧と稱せられ、兼好法師の徒然草にも、亦た多く此の草子より引用せらる。其の筆端錦繡を織り、詞句艶美を盡し、而かも文思幽玄微妙を極むるもの、今更こと〴〵しく言ふ迄もなかるべし。唯だ夫れ文を尋ぬるの士、須らく先づ範を本書に取りて、然る後に出藍の譽あるに至らば、即ち必ずや文名一世を風靡せんなり。讀者幸に勉めよや。

大正元年八月

東都の僑舍にありて

譯者　中村德五郎識す

# 例言

一　本書は、北村季吟の考訂せる春曙抄に、鈴木弘恭の更に改訂増補を加へたるを採りて、原文の骨子とし、尚ほ異本を參酌して、譯者自から重修を加へ、段節章綱の錯置を正し、誤字誤寫誤植を訂正し、殊に句讀を嚴明ならしむるに努め、曙抄に見えたる傍訓增註、鼇頭の解釋等に往々首肯し難きものあるを、修補改釋したるものも亦た尠少ならず。而かも尚ほ未だ其の全を得たるものにあらざるを憂ふ。

一　書中に見ゆる地名人名等にして、今將た考定し難きものの之れなきに非ず。但し本書は、固より史實研鑽の資料とし

て重きを置くにあらざれば、必ずしも之れが考證を主とせずして可ならんか。若し夫れ古言、難句、故事、術語等に至りては譯述の間、特に之れが說明を爲すに努めたりと雖も同語の現はれ來るもの數次なるは、其の現はるゝ毎に之れが解釋を爲すの煩を避けたるは勿論なり。例へば上達部、殿上人、地下、公達、若くは君達、頭辨、頭中將、殿上童、受領、除目、上、宮、女院、淑景舍、御櫛匣殿、職の御曹司、采女、佛名、御齋會、季の御讀經、八講、卯槌又は卯杖、祭、祭の還立、方違、大饗、衝重、懸盤、臺盤所、長女、几帳、帽額、伊豫簾、下簾、汗衫、袙、



袿、唐衣、細長、袍、指貫、裾帶、領巾、掛帶、二藍、青摺、鈍色、朽葉、蘇芳、葡萄染、櫻、柳、叢濃、紅、紅梅、窄裝束、葛城の神と言ふの類、一々枚擧に遑あらず除したるもの三四を以て數ふべし。其の他、章節の錯置を正し、字句の脫漏を補ひ、全篇百五十七段中、別に段外六章を設く。若し夫れ細事に亘りては、今一々之を贅せず、譯文中特に揭げたる注意項目に因りて諒せらるべきを望む。但し其の注意項目の要点を擧ぐれば、概ね左の如し。

一　書中、特に風俗上警むべきものと認めたる綱目は、之を削上卷にありては、卷の一の四段中、「おなじ局に住む若き人

々」の一節を削除し、下卷の百四十八段に誤入したる「今内裏」の一章を、同四段の末項に置き、卷の二の十七段中、「めのとの男こそあれ」の一節は、下卷九十六段に錯置したるを訂し、「小一條院をば」の一段を、百三十三段の末項に加へ、同十七段中、五十九段と重複せる「ひとり車に乘りて」の一節は暫く存し、「あかつきにかへる人」の一章並に卷の二の廿段の末節を削除したり。

中卷にありては、卷の五の四十七段に於ける「すゞろなる事腹立ちて」の一節を削除し、卷の六の五十九段の首節は上卷の十七段にも見えたれど、今敢て取捨せず。卷の七の六十三段中「こま犬しく舞ふもの」の前に、「なま心おとりしたる人のそゞろなること言ひむづかりて云々」の數十句を記せる異本もあれど、そは卷の五の四十七段の末文に見えたると大同小異にして、且つ其の記事の面白からねば、殊更に增補するを止めつ。さても九十二段より九十六段に至る五段は、或は下卷の百廿六段の次に誤入するもあり、又は卷の九の端がきと九十七段との間に置くもあれど皆其の當を得たるものならねば、今改めて卷の八の末段に加へつ下卷にありては、百三段の次なる無名段を、段外として五段とし、百五段百十段に於て特に增補する所あること、注意事

項に示したるが如く、百卅二段に於ける「世の中に猶いと心うきものは」以下の五節は、異本に見えざれど今暫く曙抄に從ひ、百卅三段の末節には、上卷十七段中の「小一條院」の一項を轉置し、百卅四段の前には、異本を參酌して「されど其の折めでたし」の一節を加へ、百五十五段の次なる、「心づきなきもの」を段外とし、其の首節は五十九段の後節と重複すれども、煩を厭はずして更に譯述を試みたり。若し夫れ卷末の附記、卷首の自序に至りては、筆者清少納言と、本書を物したる由來とを畧叙せるもの、讀者先づ之を見れば即ち本書の內容を解するに便なるものあるべし。

# 枕の草子目次

## 上卷

目次


卷の一……一

【一】春はあけぼの
【二】頃は
【三】正月朔日は
【四】ことゝなるもの
【五】山は
【六】峰は
【七】原は
【八】市は
【九】淵は
【十】海は
【十一】渡は
【十二】みさゝきは
【十三】家は

卷の二……七四

【十四】すさまじきもの
【十五】たゆまるゝもの
【十六】人にあなづらるゝもの
【十七】にくきもの
【十八】心ときめきするもの
【十九】過にし方戀しきもの
【二十】心ゆくもの

卷の三……一四一

目次

【二十一】木の花は
【二十二】池は
【二十三】節は
【二十四】木は
【二十五】鳥は
【二十六】あてなるものは
【二十七】虫は
【二十八】にげなきものは
【二十九】瀧は
【三十】川は
【三十一】橋は
【三十二】里は
【三十三】草は
【三十四】集は
【三十五】歌の題は
【三十六】草の花は
【三十七】おぼつかなき物
【三十八】たとへしなき物

巻の四……三二六

【三十九】ありがたきもの
【四十】あぢきなきもの
【四十一】いとほしげなきもの
【四十二】心よげなるもの
【四十三】さりもてるもの
【四十四】物の哀しらせ顔なるもの

## 中巻

巻の五……三一九

【四十五】めでたきもの
【四十六】なまめかしきもの
【四十七】れたきもの
【四十八】かたはらいたきもの

目次

【四十九】あさましきもの
【五十】くちをしきもの

巻の六……四〇四

【五十一】はるかなるもの
【五十二】關は
【五十三】森は
【五十四】湯は
【五十五】つれよりもことさに聞ゆるもの
【五十六】繪にかきて劣るもの
【五十七】かきまさりするもの
【五十八】あはれなるもの
【五十九】心づきなきもの
【六十】わびしげに見ゆるもの
【六十一】あつげなるもの
【六十二】はづかしきもの

巻の七……四七三

【六十三】むさくなるもの
【六十四】はしたなきもの
【六十五】つれ〴〵なるものの
【六十六】つれ〴〵なぐさむる物
【六十七】さり所なきもの
【六十八】なほ世にめでたきもの
【六十九】おそろしきもの
【七十】きよしと見ゆるもの
【七十一】きたなげなるもの

巻の八……五六四

【七十二】いやしげなるもの
【七十三】むれつぶるゝもの
【七十四】うつくしきもの
【七十五】人ばえするもの
【七十六】名おそろしきもの

【七十七】見るに異なる事なき物
【七十八】むづかしげなるもの
【七十九】えせものゝ所得る折の事
【八十】若しげなるもの
【八十一】うらやましきもの
【八十二】さくゆかしきもの
【八十三】心もとなきもの
【八十四】昔覺えて不用なる物
【八十五】たのもしげなきもの
【八十六】近くて遠きもの
【八十七】遠くて近きもの
【八十八】井は
【八十九】受領は
【九十】やとりの司の權の守は
【九十一】大夫は
【九十二】上達部は
【九十三】君達は
【九十四】法師は
【九十五】女は
【九十六】宮仕所は

## 下卷

卷の九……六四五
【九十七】したり顔なるもの
【九十八】風は
【九十九】心にくきもの
【百一】島は
【百二】濱は
【百三】浦は
【百三】寺は
【段外一】經は
【段外二】文は
【段外三】佛は



【段外四】物語は
【段外五】野は
【百四】陀羅尼は
【百五】あそびは
【百六】舞は
【百七】引ものは
【百八】しらべは
【百九】笛は
【百十】見るものは
【百十一】おほきにてよき物は
【百十二】短くてありぬべき物は
【百十三】人の家につぎ〳〵しき物は

## 卷の十……七三一

【百十四】廐は
【百十五】岡は
【百十六】社は
【百十七】降るものは
【百十八】日は
【百十九】月は
【百二十】里は
【百二十一】雲は
【百二十二】霧は
【百二十三】さわがしきもの
【百二十四】ないがしろなるもの
【百二十五】詞なめげなるもの
【百二十六】さかしきもの
【百二十七】身をかへたらん人などは斯くや有けんと見ゆるもの
【百二十八】たゞ過にすぐるもの
【百二十九】ささに人に知られぬもの
【百三十】いみじくきたなきもの
【百三十一】せめて恐しきもの
【百三十二】たのもしきもの
【百三十三】うれしきもの

目次


巻の十一……八二
【百三十四】たふときもの
【百三十五】歌は
【百三十六】指貫は
【百三十七】狩衣は
【百三十八】單衣は
【百三十九】わろきもの
【百四十】下襲は
【百四十一】扇の骨は
【百四十二】檜扇は
【百四十三】神は
【百四十四】崎は
【百四十五】屋は
【百四十六】きら〳〵しきもの

巻の十二……八八五
【百四十七】見ならひするもの
【百四十八】うちとくまじきもの
【百四十九】女の上着は
【百五十】唐衣は
【百五十一】裳は
【百五十二】汗衫は
【百五十三】織物は
【百五十四】綾の紋は
【百五十五】病は
【段外】心づきなきもの
【百五十六】言ひにくきもの
【百五十七】見苦しきもの


目次終

# 枕草子

清少納言

## 新譯枕の草紙（一）

【一】春はあけぼの。やう〳〵白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲の、ほそくたなびきたる。夏はよる。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるとびちがひたる。雨などのふるさへをかし。

# 新譯 枕草子

文學士　中村德五郎譯著

上卷　四卷四十四段より成る

巻の一　十三段より成る

【一】春はあけぼの。春は曙の景色ほど面白きはなし。東の山の端、ほの〴〵と白み渡り、日未だ昇らねども、射す影の映ろいて、其の山の端の少しく赤うなりたる、さては横雲の細長く棚引けるが、紫めきて彩られたる、最と面白し。

秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいとちかくなりたるに、烏のねどころへゆくとて、みつよつふたつなど、とびゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆる、いとをかし。日いりはて、、風のおと、虫のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるは、いふべきにもあらず霜などのいとしろき、又さらでもいとさむき、火などいそぎおこして、すみもてわたるも、いとつきづきし。ひるになりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火をけの火も、しろきはひがちになりぬるはわろし。

夏は夜を好とす。月夜の頃は言ふも更なり、闇の夜に螢の飛び交ふさま、或は雨降るなど、又た面白し。

秋は夕暮の景色に若くはなし。和漢朗詠集に

「秋はなほ夕まぐれこそたゞならね荻の上風萩の下露」とあり、又た綺語抄にも「夕まぐれ寝にゆく烏うちむれていづれの山の峯に飛ぶらむ」とあるが如く、茜さす夕日の華やかに、今しも西に沈まんとして、山の端に最と近ふなりたる頃しも、塒に急ぐ烏の、三つ四つ二つなんど、後になり前になりて、飛び行くさまの面白く哀れなるに、況して幾群の雁の列なりて、最と遙かに小く見ゆるなど、殊に面白し。さて日も既に入り果てゝは、吹く風の音、千草にすだく虫のこゑ〳〵など、又なく哀れなり。



冬は朝早く雪の降りたる景色の、言はんかたなく面白く、霜の最と白う置きたる朝も、亦た好きものなり。されど霜雪の降らずとも、冬は寒きを賞づべければ、火など急ぎ起し、炭持ち歩きなどするは、似つかはしきものなり。さるを晝時になりて、朝の寒さも緩み、稍微温を覺ゆるに至りては、爐、火鉢の埋火なども疎畧にして、白き灰がちになれるは宜

【二】ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、ひとゝせながらをかし。

【三】正月一日は、まいてそらのけしき、うらゝかとめづらしく、かすみこめたるに、世に有さある人は、すがたかたち、心ことにつくろひ、君をも我身をも、いはひなどしたるさま、こしからず。

【二】頃は正月と言はず、三四月と言はず、七八月、頃は九十月、さては十一月十二月、すべて一年の四季折々につけて、いづれも皆興あるものなり。

【三】正月一日は正月元日は、年改まりて、見る景色殊に珍らしく、況して初春の長閑なる空麗らかにして霞罩め渡りたるに、貴賤老弱の差別なく、流石は年の始とて、人皆其の容姿を粧ひ整へ、殊に心をすが〳〵しく持ちて、君が代の八千



七日は、雪まのわかな、青やかにつみ出つゝ、れいはさしもさるもの、めぢかからぬところにもてさわぎ。白馬みんとて、里人はくるまきよけにしたてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひきいるゝ程、かしらども一ところにまろびあひて、きしぐしもおち、よういせれは、をれなとしてわらふも、又をかし。左衛門のぢんなどに、殿上人あまたたちなどして、とれりの弓どもを代を賀し奉り、又た人をも我身をも言祝ぎなどしたる、感興殊に深し。

七日は七種とて、芹、薺、御行、蘩蔞、佛座菘、蘿蔔を採りて羹とし、之を食すれば萬病邪氣を除くとぞ言ふなる。されば野邊の雪間に、青やかに芽立ちたる此の七種の若菜を摘み取りて、例は斯る菜など、目近く見馴れざる宮殿にも、今日は持て囃されて大騒なり。殊に白馬の節會なれば、都人は更なり、近郷近在の人々に至るまで、美々しく立派なる車に乗りて、白馬を見に行くが多く、其の白馬の陣は建禮門なれば、人皆陣に近き中の御門な

時て、馬どもおどろかしてゆらふを、はつかに見いれたれば、たてしどみなどの見ゆるに、さのもりづかさに女官などの、ゆきちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、こゝのへをかくたちならすらんなど、おもひやらるゝうちにも、見るはいとせばきほどにて、されりがかほのきぬもあらはれ、しろきものゝゆきつかぬところは、まことはくろき庭に雪のうらぎえたる心ちして、いと見ぐるし。馬のあがりさわぎたるも、おそろしくおぼゆれば、

る待賢門より入りて、其の門の閾に車を引き入れん時、車搖ぎて、乘合へる女房などが、頭も一所に轉び落ち、額に刺せる櫛を落しなどしつ、よもや轉び落ちぬべしとも覺悟せざれば、不用意にも其の櫛を折らしなどして笑ひ合へるも、亦た時に取りての愛嬌なり。さて宮城の東の諸門は、左衛門の官人之を守り、建春門は即ち左衛門の陣とて、其の官人の居る所なり。昇殿を許されたる六位以上の殿上人、此の陣に多く立ち列びなどして、中には隨身の舍人が所持する弓を取りて、馬を驚かして笑ふなど、此方より密と見るを得たれば



ひきいられて、よくも見やられず。

宮殿の日除にしたる立蔀なども見え、主殿寮の官人、さては女官などの、彼方此方に行き交ふさまの面白く、九重の雲深き禁中に、如何なる人なれば、斯くも立ち馴るゝならんと羨ましくも思ひやらるゝ中に、禁庭とは言へど、我等が今見得らるゝ所は、左まで廣からねば、女舍人の顏の地膚も見え、塗りたる白粉の斑にて、顏の生地の出でたるなどは、宛然黑土の庭に、白雪のうら消えたるやうにていと見苦しく、間近なれば、馬の跳り騷ぐなども恐しくて、覺えず身を車の內に引き入れられて、充分には節會の態を見遣りも得せず。

八日、人々よろこびして、はしりさわぎ、車のおとも、つれよりはことにきこえてをかし。

十五日は、もちかゆのせくまゐる。かゆの木ひきかくして、家のごだち女房などのうかゝふを、うたれじとようゐして、つれにうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらん、うちあてたるは、いみしうけうありとうちわらひたるも、いとはえばえし。れたしと思ひた

八日は女王に祿を給ひ、女官の位階を叙せらるゝ行事なれば、そを祝ひ歡びて、西東に駈け廻り、車の響きも、常時よりは殊の外高く聞えて可笑し。

十五日は望粥の節供とて、小豆、粟、黍、稗、米などの七種の粥を作り參らすなり。此の時特に用ふる粥の木、又は粥杖といふは、卯の花の咲くなる空木の先を四割にして、粥を挿むものなるが、此の粥の木にて腰を打てば、子を產む呪咀なりとて、之を隱し持ちて、家の若き女房達の、打たんと狙ひ窺ふを、打たれまじと用心して、常に我身の背後に氣を配る



ることわりや。こぞよりあたらしうかよふむこのきみなどの、うちへまゐるほどを、こゝろもとなく、ところにつけて、われはとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにたゝずまふを、前にゐたる人は、心えてわらふを、あなかま〳〵とまれきかくれど、きみ見しらずがほにて、おほどかにてゐたまへり。こゝなる物とり侍らんなど、いひよりはしり、うちてにぐれば、あるかぎりわらふ。をとこ君もにくからず、あいぎやうづきてゐみたる。ことにおども可笑きに、如何なる機會にや、打ち當てたる者は甚く興がりて、笑ひさゞめくも賑はしく、打たれたる人の殘念がるも亦た道理にて可笑しさ言はんかたなし。去年より通ふ新聟など、是は當時の風習とて、新婚の男女ながら同棲せず、男より女の方に通ふものなるが今しも其の聟君の參內せらるる所を、如何でかして打ち參らせんとて、我こそ打ち當てんと思ひたる女房の、其の家の程につけて好き所を撰び窺ひ、奥の方に隱れ佇むを、前に立てる人の之を知りて笑へば、其の女房、嗚呼喧ましとて手を振りて笑を制すれど、聟君は

ろかず、かほすこしあかみてゐたるもをかし。又かたみにうちて、をとこなどをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、なきはらだち、うちつる人をのろひ、まがゝしくいふもをかし。内わたりなどやむごとなきも、けふはみなみだれて、かしこまりなし。除目のほどなど、うちわたりはいとをかし。雪ふりこほりなどしたるに、まうしぶみもてありく四位五位、わかやかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老てかしらしろきなどが、人に少しも見知る樣子もなく、悠揚に寛かなる態にて居たまへば、此處なる物取り侍らんなど謀り欺きて、巧に言ひ奇り、急に走り打ちて逃ぐれば、あらん限り笑ひ興ずるも面白く、打たれたる聟君も、嬉しく穩なる態して、愛嬌づきて笑を含みたる、或は驚きもせで、少しく顏を赤らめゐたるなど、亦た可笑し。斯くて互に打ちつ打たれつ、花嫁さへも其の良人を打ち興ずるに、如何なる心にやあらん、祝儀にて戯れ打たるるを、中には腹立ちて泣くもあり、打ちつる人を怨みて、恐ろしく罵るもあるは、又た可笑し。氣高く尊き禁中に



さかくあないいひ、女房のつぼねによりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりてさき聞するを、わかき人々は、まれをしわらへど、いかでかしらん、よきにそうし給へ、けいし給へなどいひても、えたるはよし、えず成ぬるこそ、いとあはれなれ。

ても、今日は此の粥の木にて打ち亂れて、禮儀も疎かなり。此の外、除目とて、諸國の司の任官を行はせらるゝ有樣などを見るに、列を成して渡り行くも面白く、雪降り氷れる中を、申狀とて已が望みの訴狀、例へば名替、國替、更任、任府などの申文を携へ歩き、國司は五位以下に相當すれども、四位以上とても、望みに任かせて其の撰に應ずれば、未だ年若くて四位五位に至れる人は、何の國を望むも心地よげにて樂もしげなれど、既に白髮の老人などが、緣を賴みて自已の内情の容子を人に語らむ、禁中又は中宮の女房達の局に

三月三日は、うら〳〵とのどかにてりたる。もゝの花の、いまさきはじむる。柳

頼み寄りて、我身の才學あり智識あることなど、充分に說き明して、此度の除目に漏れぬやう、一臂の勞を貸し給へと頼み入るを、若き女房達は可笑がりて、其の老人の眞似などして笑ひ合へど、老人如何でか我身の笑はるゝをも知らばこそ、尙も主上陛下へ宜しく奏し給へ、皇后陛下へ啓し給へと、くど〳〵しく頼み言ふに、それも望み通りの官職を得たるは善けれど、頼み甲斐もなくて、除目に漏らされたるは不憫なり。

三月三日は桃の節句にて、日の麗らに照りて長閑なるが興あるに、桃の花の今咲きはじむ



など、いとをかしきこそさちなれ。それもまだ、まゆにこもりたるこそ、をかしけれ。ひろごりたるにくし。花もちりたるのちは、うたてぞ見ゆる。

おもしろくさきたるさくらを、ながくをりて、おほきなる花がめにさしたるこそ、をかしけれ。櫻のなほしに、いだしうちきして、まろうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこちするもをかしく、柳の枝の糸の垂れたるなど、言ふ迄もなく面白く、「青柳の眉にこもれる糸なれば春のくるにぞ色まさりける」と新千載集にも見えたる如く、柳のやう〳〵芽ぐみたるばかりなるは、最と面白けれど、其の葉の伸び廣ごりたるは惡く、桃の花も、散りたる後は興さめて、見るもうたてきものなり。

咲き振りの面白き櫻の枝を長く折りて、大なる花瓶に挿したるは好きものなり。客人にもあれ、中宮などの御兄君たちにもあれ、表白く裏赤き櫻色の直衣を上に着て、其の下に出袿とて、廣袖の大なる內着を、外に見ゆるやう

かくぬて、ものなどうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、とりむしの、ひたひつきいとうつくしうて、とびありく、いとをかし。

まつりのころぞ、いみじうをかしき。木々のこの葉まだしげうはなうて、わかやかにあをみたるに、かすみもきりも、へだてぬそらのけしきの、なにとなくそゞろにをかしきに、すこしくもりたる夕つかた、よろなど、しのびたるほとゝぎすの、とほうそら耳かとおぼゆるまで、たゞ〳〵しきを

に袖を出して着たる人の、花瓶の許に近く居て、物などいひたるは最と可笑しく、其の櫻花の邊に、鳥蝶などの顔つき優しく、戯れ飛び交ふさまは、殊に面白きものなり。

四月中の酉の日は賀茂の祭なるが、此の祭の前後の頃は、最と興ありて可笑し。祭の前つ方は、樹々の木の葉まだ茂からず、若葉の青くとしたるに、卯月清和の天なれば、空には霞も罩めず、霧も閉さず、晴れ渡りたる景色の、何故ともなく漫に面白きに、況して少しく曇りたる日の暮つ方、又は夜など、忍び音に鳴く杜鵑の聲を聞きて、確か今のは杜鵑な



きつけたらん、何ごゝちかはせん。まつりちかくなりて、あをくちば、ふたあゐなどのものども、おしまきつゝ、ほそびつのふたにいれ、かみなどにけしきばかりつゝみて、ゆきちがひもてありくこそをかしけれ。すそご、むらご、まきぞめなど、つれよりもをかしう見ゆ。わらはべの、かしらばかりあらひつくろひてなりはみななへほころび、うちみだれかゝりたるもあるが、けいしくつなどのをすげさせ、うらをさせなどもてさわぎ、いつしか其日

りけんかし、或は遠き空耳の聞き違へたるにや、夫れかあらぬかと思ふほどに、幽かに杜鵑の遠音を聞きたらん時の心持は、何に喩へんやうもなく面白し。

さて賀茂の祭も近づきぬれば、人々衣裳の用意などしつ、青朽葉色の絹とて、表は赭黄色の、裏は青色なるもの、さては二藍とて、赤藍と青藍との間の色に染めたる絹などを、押し卷きて絹櫃の蓋に入れ、紙などにて僅に樣子ばかりに包み、彼方よりも此方よりも、行違ひて持ち歩くさまの面白さよ。殊に裾濃とて紫、紺、蘇芳などの好める一色にて、上の方

にならんと、いそぎはしりありくもをかし。あやしうをどりて、ありくものどもの、さうぞきたてつれば、いみしくちやうざといふ法師などのやうに、れりさまよふこそをかしけれ。ほどくにつけて、おやをばの女あれなどのともして、つくろひありくもをかし。

を淡く、裾の方を濃く染め出したるもの、或は叢濃として、此處彼處薄く濃く、一樣ならぬ染め色のもの、又は卷染にしたる物など、平常よりは一層目立ちて面白く、女童の頭の髪の、みは流石に洗ひ飾れるが、身形は粗末にして着たる衣物も萎れ綻び、しどけなく亂れたる態したる者もあるが、足駄の類なる履子、さては沓などの鼻緒ばかりは、新しく取り替へ沓の裏の破れたるは、縫ひ綴れよなどと、各身柄に應じて騷ぎ合ひ、祭の日を待ちかねて何時その日の來るならんと、兒童等の急ぎ走り廻るも可笑しく、さて其の日になりて衣裳



【四】 ことゞくなるもの

法師のことば。をとこ女のことば。げすの詞には、かならずもじあまりしたり。

を更め、裝束美々しく飾らしむれば、日頃は怪きまでに狂ひ歩きたる童女も、今日は法師の長者か物々しく練り歩く態して、しとやかに逍遙ふこそ殊勝なれ。斯くて其の身分に應じて、母親、伯母、又は姉など、其の童女の供に付き添ひて、体裁つくりて歩くも、亦た面白きものなり。

【四】 異事なるもの

同じ事ながらも、異なりて耳に聞ゆるものは法師の詞の俗人に變れる、男と女とは天性より音聲を異にしたる、さては身分賤しき下衆の詞は、自から貴人と異なりて、字餘りの詞

おもはん子を、法師になしたらんこそは、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。さうじものゝあしきをくひ、いぬるをも。わかきは物もゆかしからん、女などのある所をも、などかいみたるやうに、さしのぞかずもあらん。それをもやすからずいふ。ましてげんじやなどのかたは、いとくるしげ也。みたけ、くまの、かゝ遣するものなり。

大切に思へる子を、圖らずも法師にしたるは異樣の事にて、最と心苦しきものなり。されど一子出家すれば、九族天に生ずと言はるゝ如く、法師となりて菩提に入るは、世にも賴もしき業なるを、俗人の破戒無慙なる心柄より見れば、木の端屑のやうに物の役にも立たずと思はるこそ、哀れに痛はしけれ。專ら道を修じて、物欲を絶つものから、其の食事とても、精進物の粗惡なるを食ひて滿足し、寢るにも唯だ一人にて安んずるものを、誰なれば惡ざまに謗らんとはする。法師とても木石



らぬ山なくありくほどに、おそろしきめも見、しるしあるきこえ出きぬれば、こゝかしこによばれときめくにつけて、やすげもなし。いたくわづらふ人にかゝりてものゝけてうずるも、いさくるしければ、こうじてうちれふれば、れふりなどのみしてささがむるも、いと所せくいかにおもはんと。これはむかしのことなり。いまやうはやすげなり。

の身ならねば、年若き法師などは、物欲の心も起ることあるべく、女などを忌み慊ふこともあるまじければ、時には女の居る所を差し覗きもすべきに、それを無下に安からず謗るは、宜しからぬことなり。殊に驗者とて、祈禱調伏の靈驗ある人に至りては、尙更ら苦痛を覺ゆるなるべし。さるは大和の御嵩なる金峯山、紀伊の熊野なる新宮、本宮、那智の三所など、何れも山路の難所なるに、其の外の峻山高嶽、一として到らぬ所なく、斯る間に幾度か恐ろしき事に出遇ひて、難行苦行を重ねたる曉に、漸く祈禱の靈驗著くなりて、其

の名も世に聞え出づるに至れば、此處彼處より招かれて、評判いよ〳〵高く、已が運勢のますます榮ゆるにつけて、片時も心を安んずるの暇もなし。者し夫れ重態の患者を祈禱して、妖邪を調伏することの難業なれば、驗者自から困し疲れて、打ち眠ることもあるに、彼の驗者は坐眠のみすると、咎めらるゝなど心苦しければ、人のおもはくの如何ならんかと、さま〳〵に心遣ひせられて、所狹く覺ゆるなり。されど法師が、其の圓頂黑衣の姿に耻ぢて、斯くも身の行を愼みしは、今は過し昔の事にて、濁れる當世にありては、法師の



大進なりまさが家に、宮の出させ給ふに、ひんがしのかどはよつあしになして、それより御こしはいらせ給ふ。北の門より、女房いくるまども、ぢんやのゐれはいりなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず、よせておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうけの車などは、門ちひさければ、さはりてえいられば、れいのえんだうしきておるゝに、いと作法も亂れたれば、一向に安らげなることこそ、嘆かはしけれ。

大進、少進など、中宮の官人なるが、其の大進の平生昌の邸に、一條天皇の中宮にて清少納言の主君なる、關白藤原道隆卿の女定子の君が行啓ありけるに、東の入口は、四足門にて廣ければ、中宮の御輿は、此の東門より入らせ給へど、付添の女房の車は、北の門より入るに、此處には禁中のやうに、陣屋の宿直人も居らねば、見咎むる者もなからん、平常のまゝにて入りなんと思ひて、頭の髮も繕はず、勿論宮中とは違ひて、乘車のまゝ門を入

とにくゝはらだゝしけれど、いかゞはせん。殿上人地下なるも、陣にたちそひ見るもねたし。御前にまゐりて、ありつるやうけいすれば、こゝにも人は見るまじくやは、などかはさしもうちとけつると、わらはせ給ふ。されどそれは皆めなれて侍れば、能したてゝ侍らんにしこそ、おどろく人も侍らめ、さてもかばかりなる家に、くるまいらわ門やはあらん、見えばわらはんなどいふほどにしも、これまゐらせんとて、御硯などさしいる。いでいとわろり、車を軒づけにして降るべきものと侮りゐたるに、已が陪乘し奉れる姫宮の檳榔毛の御車などは、門小くて入り難ければ、例の莚道とて、莚を敷きたる上を、車より降りて歩むに、乘車のまゝ入り得ざりしことの、最と憎く腹立しけれど、是非もなし。さるを殿上人を始めとし、昇殿せざる地下人に至るまで陣屋に立ち列びて、我等が莚道を歩み行く態を見てありしこそ怨みなれ。されば邸に入りて後、中宮の御前に參りて、事の次第を申し上げたるに、中宮の御詞には、此處なりとて何故か人の見ざるべきや、さるを見る人のなかるべしとて髪も繕はず、慎み氣もなう打ち解けたるよと、笑はせ給へば、さん候、御詞の如く、何處にても打ち解くまじき事にて侍れど、殿上人などは、常に供附の女房などを見馴れたれば、左のみ立添ひて見給ふべきにも待らじ、能く繕ひて化粧したらんには、夫れこそ却りて目を驚かして見られ侍らむ、されど斯る大家に、車の入らぬ程の小き門なるは似合しからず、生昌が今にも此處に見えなば、笑ひ罵らなんなど言へる時しもあれ、生昌入り來りて、是を進上し奉らんとて、硯の蓋に菓子など入れて參らせたるを、已れ短



くこそおはしけれ、などてか其門せばくつくりてすみ給ひけるぞといへば、わらひて、家のほど身のほどにあはせて侍るなりといらふ、されど門のかぎりを、たかくつくりける人もきこゆるはといへば、あなおそろしとおどろきて、それはうていこくがことにこそ侍るなれふるきしんじなどに侍らずば、うけ給りしるべくも侍らざりけり、たまたま此みちにまかりいりにければ、かうだにわきまへられ侍るといふ。この御みちもかしこからざめり、えん

だうしきたれば、みなおちいりてさわぎつるはさいへば、雨のふり侍れば、げにさも侍らん、よし〳〵またおほせかくべき事もぞ侍る、まかりたる侍なんとていね。なに事ぞ、なりまさがいみしうおぢつるはとはせ給ふ。あらず、車のいらざりつることさいひ侍つると申ておりぬ。

刀直入に生昌を謗りて、何故に斯くも狹き門を造りて住みけるぞと惡口すれば、生昌笑ひて、身に相應したる家を作るなれば、從ひて門も狹きなりと答へけるにぞ、已れ押し返して、されど唐土の于公は、其の住む里の門の破れて、里人の之を作り直さんとする時、高く大なる門にせよ、我れ民を治むるに陰德あれば、子孫に至りて必ず諸侯となる者ありて四馬高蓋の車を乘り入れんと言へるに、果して其の子于定國ようして世に榮えたる例は、前漢書に見えたるに非すやと言へば、生昌驚きて、漢書などを引かるゝことの恐ろしや、



于定國が故事などは、年久しく螢雪の功を積みたる進士ならでは知るべくもあらず、生昌幸にも大學の門に入り、文章生を經て、今は大進たればこそ、此の故事をも辨へたるなれと言ふ。さらば左程の御身にしては、門狹くて筵道を敷きたるなどは、餘りに賢からざる業ならずや、女房たちは皆泥の中に陷りて騷ぎたるにぞと詰れば、雨降りたればこそ、實に道の惡しかりつらんと詫言いひて、さて又た此處に居たらんには、如何なる難題を言ひかけられんも知れず、早く此の席を退らんに若かずとて、逃げ行きぬ。中宮之を見聞き

ひめみやの御かたの、わらはべのさうぞく、せさすべきよし、おほせらるゝに、わらはのあこめのうはおうひは、何いろにつかうまつるべきと申を、又わらふもことわりや、姫宮のおまへのものは、れいのやうにて

給ひて、生昌が甚く驚き恐れしは、何事なりやと仰せありければ、別事に候はず、門の狹くして車の入らざりしことを、申し侍りしとのみ御答して、漢書の于定國が事は申し上げずして、御前を退り下りぬ。「同じ局に住む若き人々などして」より

「あはれ、あれをはしたなく言ひけんこそ、いとほしけれと、笑はせたまふ」迄を、殊更に削除す

一條天皇の第一の姫宮なる備子内親王の御方に仕へ參らせる童女の、衣服調度などの裝束を整ふべき由、中宮より大進の生昌に御下命ありければ、生昌の申し上ぐるやう、童女の袙の上着は何色に仕りて宜しきや、姫宮の御膳の具も、通常の物にては大過ぎて見惡くけ



は、にくげにさふらはん。ちうせいをしき、ちうせいたかつきにてこそ、よくさふらはめと申を、さてこそは、うはおそひきたるわらはべも、まゐりよからめといふを、なほれいの人のやうに、かくな、いひわらひそ、いときすくなるものを、いとほしげにと、せいし給ふもをかし。ちうげんなるをりに、大進ものきこえんとありと、人のつぐるをきこしめして、又なでうこといひて、わらはれんとならんと、おほせらるゝもいとをかし。ゆきてきけと

れば、折敷即ち飯器を載する食盤、さては高抔即ち食物を盛る腰高の土器なども、何れも小き物こそ宜しかるべけれと申し上ぐるに、童女の上衣は汗衫とこそ言ふべきを、袙は汗衫の下に着るものなれば、其の汗衫を袙の上襲と生昌の言へるは、何時もながら女房達の笑の種にて、且は小き折敷、小き高坏を、ちうせい折敷、ちうせい高坏と言へる訛の可笑しければ、已れ之を調戯ひて、生昌の詞そのまゝに、ちうせい折敷、ちうせい高坏なれば、袙の上襲を着たる童女も、姫宮の御前に參りて御陪膳などするに便宜なるべしと嘲り笑へ

のたまはすれば、わざと出たれば、ひと夜の門のことを申納言にかたり侍しかば、いみしうかんじ申されて、いかでさるべからんなりに、たいめんして申うけ給はらんとなん申されつるとて、又こともなし。ひと夜の事やいはんと、心ときめきしつれど、いましづかに御つぼねにさふらはんと、じゝていぬれば、かへりまゐりたるに、さてなにごとぞとの給はすれば、申つる事を、さなんとまれびけいして、わざとせうそこしよび出べきことにもあらば、中宮之を制し給ひて、やよ清少納言、眞面目なる應對に當りて、例の人のやうに言葉尻を取りて、斯くも言ひ笑ふものにあらず、生昌は極めて質樸實直なる者なれば、左程に嘲るは氣の毒なりと、勞はり給ふも面白し。

さて何方へも付かぬ間中にて、靜に局にあらんにも便無き折に、大進生昌が御身に話すことありと人の告ぐるを、中宮聞き傳へ給ひて又た生昌が何事かを言ひて、笑ひ嘲けられんを爲めなるへし、何の話にや行きて聞けよと仰せありければ、聞きたくは無けれど、故意と我が局より出でゝ、生昌の居る所に押し懸け



ぬを、おのづからしづかにつぼねなどにあらんにも、いへかしとてわらへば、おのが心ちに、かしこしとおもふ人のほめたるを、うれしさや思ふとて、つげしらするならんとの給はする、御けしきもいとをかし。

行けるに、曩に中宮の行啓ありし夜、門の狹きにつけて于定國の故事を語りたる一條を、生昌が兄惟仲中納言に話したりしかば、中納言甚く感歎して、好き機會もあらば、是非御身に面會して、いろ〳〵御話を承りたしと申されたりとの外に、別段何の用事もなし。餘りの馬鹿々々しさに、先夜生昌が怨び寄らんとせし一件を話し出して、充分に虐めて呉れんものと、胸の中は騷げども、間もなく御局に參りて、靜にゆる〳〵と物語り候はんと生昌の言へるにぞ、さらばとて其の場を辭し歸り、中宮の御前に參りたるに、何事なりしか

うへにさふらふ御れこは、

と問はせ給へば、生昌の申つる事を其の儘に左様しか〳〵なりと啓上し奉りて、斯程の事にわざ〳〵人を以て呼び寄來さずとも、靜に局にありて休息はん折に、自から來りて話せば宜しかるべきにと笑へば、そは生昌が賢しと敬へる兄の惟仲が褒めたるなれば、其の事を語り聞かさば、さぞ其方の悅ぶならんと思へばこそ、わざ〳〵呼び寄來して話したるなれと、中宮の仰せらるゝ御樣子の、如何にも生昌が我身に懸想して追從するかの御推量も見えて可笑し。

一條天皇は猫を御寵愛ありて、左右に侍ふ猫



かうふり給わりて、命婦のおもとて、いとをかしければ、かしづかせ給ふが、はしに出たるを、めのとのうまの命婦、あなまさなや、いり給へとよぶに、きかで日のさしあたりたるに、うちれふりてゐたるを、おどすとて、おきなまろいづく、命婦のおもとくへといふに、まことかとて、しれものはしりかゝりたれば、おびえまどひて、みすのうちにいりぬ。あさがれひのまに、うへはおはします、御らんじていみしうおどろかせ給ふ、れこは御ふところを五位に叙し賜へり。女房の五位に叙せられたるを命婦と言ふなれば、此の猫を命婦の御許と名づけて、常に御側近く愛養せ給へるに或日其の猫の椽端に出でありしを、猫役の命婦が見て、あな宜からぬ事かな、内に入り給へと呼べども、聞き入れずして、日の射し當れる椽端に眠りゐたれば、威さん賦にて、翁丸と呼べる犬を招きて、翁丸いづくにあるぞ早く來て命婦の御許を食へと言へば、其處は畜生の痴愚なり、犬は誠と思ひて猫に飛び付きければ、猫は驚き惑ひて、主上の在する御簾の中に逃げ入りぬ。此の時主上は、清涼殿

にいれさせ給ひて、なのごどもめせば、藏人たゞたかまゐりたるに、此おきなまろうちてうじて、いぬ島につかはせ、たゞいまとおほせらるれば、あつまりてかりさわぐ。うまの命婦もさいなみて、めのとかへてん、いとうしろべたしと、おほせらるれば、かしこまりて御前にも出ず。いぬはかり出て、たきぐちなどして、おひつかはしつ。あはれいみしくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭辨。柳のかつらをせさせ、もゝの花かざしにさゝせ、さくらの南なる朝餉の間に在しましけるが、之を御覽じて甚く驚かせ給ひ、猫を御懐に入れさせ直に近侍の男どもを召し給へば、藏人源忠隆、召に應じて參りたるに、不屈なる痴愚の翁丸を打ち懲じて、備前の犬島に流罪申し付けよ、唯今早速にと仰せられければ、藏人、瀧口など寄り集まりて、翁丸を狩り騒げり。藏人は文書、訴事、奏宣など、總べて殿上の事を奉行する重職にて、瀧口は藏人所に屬し禁中の警護勤番の武士にて、武勇ある者を擇びて之に補するなり。さて翁丸の騒ぎに付けて、猫の守役たる命婦にも罪あり、心もとな



こしにさゝせなどしてありかせ給ひしをり、かゝるめ見んとはおもひかけけんやとあはれがる。おものゝをりは、かならずむかひさふらふに、さうぐしくこそあれなどいひて三四日になりぬ。ひろつかた、犬のいみしくなくこゑのすれば、なにその犬のかくひさしくなくにかあらんときくに、よろづの犬どもはしりさわぎとふらひにゆき。みかはやうどなるものはしりきて、あないみし、犬を藏人二人してうち給ひ、しぬへし、ながさせ給ひけるが、かく後暗き科によりて、其の職を免せらるべしとの御諚ありければ、守役の命婦も恐れ畏まりて、籠り居て御前にも出でず。斯くて翁丸を狩り出したれば、藏人瀧口などして、仰の如く遠く追放してけり。憐れなるかな今の今まで、悦びて走り廻りける翁丸が、一旦罪を得て、無殘にも棄てられけるよ。想ひ起せば三月三日の桃の節句に、藏人頭にて辨官を兼ねたる頭辨行成卿が、此の犬を愛して、柳にて作れる鬘を着せ、桃の花を其の鬘に挿せ、櫻の花を腰の邊に挿せて、樂み歩かせ給へりしが、其の折には、何とて斯る流罪の憂目を

へりまゐりたるとて、てうじ給ふといふ。心うのことや、おきなまろなり、たゞたかされふさなんうつといへば、せいしにやるほどにからうじてなきやみぬ。しにければ、門のほかにひきすてつといへば、あはれがりなどする夕つかた、いみしげにはれ、あさましげなる犬のわびしけなるが、わなゝきありけば、あはれまろか、かゝるこぬやは、このごろは見ゆるなどいふに、おきなまろとよべど、みゝはも聞いれず、それぞといひ、あらずといひ、くる見るべしとは、思ひもかけざりしものをと、今更ら不憫に堪へず。且つや主上の御食事の折には、必ず此の犬を迎へて、御前に參り侍りしものを、今其の犬の居らねば、最と寂しげなる心地するなど話し合ひけるに、三日四日過ぎぬる晝つ方、翁丸か有らぬか、甚く犬の悲鳴の聞えければ、何の犬ぞ、斯くも久しく鳴くなるはと問ふに、友なる多くの犬も、其の悲鳴を聞きつけて走り騷ぎ、吊ひ悲みて寄り集まる態なるに、御剛人とて禁中の不淨物を扱ふ下衆の女の馳せ來りて言ふやう、誠に不憫の事なり、流罪に處したる翁丸の歸り



ちぐち申せば、右近ぞ見しりたる、よべとて、しもなるを、まづさみのことゝてめせば、まゐりたり。これはおきなまろかと見せさせ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又おきなまろとよべば、よろこびてまうでくるものを、よべどよりこず、あらぬなめり。それをうちころして、すて侍りぬとこそ申つれ。さる物どもの二人してうたんには生なんやと申せば、心うがらせ給ふ。くらうなりて物くはせたれどくはれば、あらぬも來れりとて、藏人忠隆、同實房の二人して甚く打ち懲じ給へば、最早死ぬべしと言ふにぞ、何の犬かと思ひしに、そは翁丸と聞くものから、心配に堪へずして、左まで打ち懲じなせそと、忠隆實房を制しやりしに、辛くも鳴き止みたり。されど打ち懲されて翁丸は死にければ、門外に引き出し棄てたりと聞くからに、不憫なることしてけりと嘆きつゝある其日の暮つ方、腫れに腫れて淺ましく難義なる態の犬、何處よりか來りて、震ひ戰きながら歩めるに、斯は翁丸か有らぬか、禁中には翁丸の外に、斯る犬は此の頃見えずなど評し

のにいひなしてやみぬる、つとめて。御けづりぐしにまゐり御てうづまゐりて。御かゞみもたせて御らんずれば、さふらふに、犬のはしらのもとについゐたるを、あはれきのふ、おきなまろをいみじう打しかな、しにけんこそかなしけれ、何の身にか此たびはなりぬらん、いかにわびしきこゝちしけんと、うちいふほどに、此れたるいぬ、ふるひわなゝきて、なみだをたゞおとしにおとす。いとあさまし。さはこれおきな丸にこそありけれ、よべはかく合ひて、試みに翁丸よと呼べども、耳にも聞き入れねば、こは翁丸にあらずと言ひ、否翁丸に相違なしとも言ひて、口々に定まりなければ、右近の内侍こそ善く見知りつれ、右近を呼べよと、中宮の仰せられければ、恰も下の局に居て御前に在らざりし右近を、急の御用なりとて召し來るに、是は翁丸なりやと見させ給へば、如何にも似ては侍れど、いまいましげに腫れたれば、定かには見極め難し、又た常には翁丸と呼べば、悅びて參り來るものを、今は呼べども近寄り來ざれば、翁丸には非ざるべし、最も既に打ち殺して捨てたりれしのびてあるなりけりとあはれにて、をかしきことかぎりなし。御かゞみをもうちおきてさはおきなまろといふに、ひれふしていみじくなく。御前にもうちわらはせ給ふ、人々まゐりあつまりて、右近内侍めしてかくなどおほせらるれば、わらひのゝしるを、うへにもきこしめしてわたらせおはしまして、あさましう犬なども、かゝることゝある物なりけりと、わらはせ給ふ。うへの女房たちなども、きたりまゐりあつまりてよぶにも、いまぞたちとこそ聞き侍れ、藏人二人して打ち懲じたらんには、生きてあらんこと萬々なかるべしと申すにぞ、中宮にも心憂く思ひ悲ませ給へり日も暮れて暗うなりたる後、食物を與へたれども食はねば、此犬は翁丸にはあらで、翁丸は既に死にて、此の世に有らぬものと定め合ひて止みぬ。翌朝早く中宮の御櫛を梳りに參り、御手洗水を差し上げ、さて御鏡を持ちて御側に侍ひ、中宮の御鏡を御覽じ給へる折しも、柱の下に彼の犬の跪坐たれば、翁丸を思ひ出されて、憐れ昨日、翁丸を酷く打ちて殺したるこそ悲しけれ、此度は何に生れ變るか

うごく、なほかほなどはれためり。ものてうせさせばやさいへば、つひにいひあらはしつるなど、わらはせ給ふに、たゞたかきゝて、大はん所のかたより、まことにや侍らん、かれ見侍らんといひたれば、あなゆゝし、さるものなしといはすれば、さりともつひに見つくるをりも侍らん、さのみもえかくさせ給はじといふ也。さてのちかしこまり、かうじゆゐされて、もとのやうになりにき。なをあはれがられて、ふるひなき出たりしほどこそ、よにしらは知らねど、其の打たれて悲鳴を上げたる時の、如何ばかり聞き苦しかりしよと仰せらるゝ折柄、柱の元に居たる犬の之を聞きて、わな〳〵と震ひながら、際限もなく涙を流す態の、如何にも淺ましければ、さては此の犬翁丸にてありけり、昨夜は未だ恐れ憚りて、隱れ忍びてありけるなりと思へば、哀れにも亦た可笑しきこと限りなし。されば中宮も、御覽じありたる鏡を下に置かせて、さては翁丸よと呼び給へば、平伏して甚く鳴くに、始めて愁眉を開きて笑はせ給へり。斯くて人々も參り集りたれば、彼の右近の內侍を召して、



すなかしくあはれなりしか、人々にもいはれてなきなどす。

斯る次第を仰せられけるに、皆々笑ひ騷げるを、主上にも聞しめして、此の處に渡御あらせられ、淺ましき畜類の犬ながら、昨夜は恐れ憚り、今朝は悲み鳴きて、呼べば平伏すなどの心あるものかなとて笑ひ給ふ。斯る間に禁中の女房達も集り來りて、翁丸よと口々に呼ぶに、今は呼ばるゝ儘に起ち動けど、顏は尙ほ腫れたれば、藥を調合せさせて、腫れたる所に粘け遣らんにはと申せば、遂に翁丸なることを言ひ露はしたりとて、中宮の笑はせ給ふに、藏人忠隆之を聞きて、女房達の禁中の宿直し侍ふ臺盤所より來りて、翁丸が參り

たりとは誠にや、一見したしと申すにぞ、已れ翁丸を勞はりて、そは容易ならぬ事なり、翁丸など然るもの來り侍らずと返答せしむれば、左程に隱し給ふとも、何時かは見る機會もあるべし、忠隆の怨みがましく言へるも心惜し。さて其の後、翁丸の畏こまりて、猫を食はんともせざれば、勘當を赦されて、故の如く愛養せられたり。さても腫れ上りたる悼ましさに哀れがられて、翁丸の震ひ戰きて鳴きたりし彼の時ほど、世に又となく可笑しく不憫なるはあらざりしが、已れ翁丸を勞はりしを、人々にも言ひ出られては、其の當時を想ひて、泣きなどすることあり。



正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は、くもりくらしたる。七月七日はくもり、夕かたはれたるそらに、月いとあかく、ほしのすがた見えたる。九月九日に、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたるわたなどもいたくぬれ、うつしのかもてはやされたる。つとめてはやみにたれど、猶くもりて、やゝもすればふりおち

五節供の中にて、正月朔日と三月三日とは、空晴れて麗かに日の照りたるが面白く、五月五日は、黄梅の時節ながら、流石に降らずして、終日曇りたるが好し。七月七日は、晝曇りて、夕方より晴れたる空に、月の光いと明らかにして、ちら〳〵と星の見えたるが面白く、九月九日は、夜の明け方より少しく雨降りて、菊も甚く露れて露したゝり、霜を防がん爲めに菊の花に着せたる綿も濕りて、其の綿に菊の移り香したるが持て囃されたるも可

ぬべく見えたるもをかし。

よろこびそうするこそをかしけれ。うしろをまかせて、しやくさりて、御前のかたにむかひてたてるを、はいしぶたうしさわぐよ。

いま内裏のひんがしをば、北のぢんとぞいふ。ならの木のはるかにたかきがたてるを、つねに見て、いくひろかあらんなどいふに、權中將のもとよりうちきり

笑しく、早天には雨止みたれども、空尙ほ曇りて、動もすれば今にも降らん景色なるも、亦た面白し。

拜賀の折、又た位階昇進したる時の奏慶は面白きものなり。衣裳の裾を引き、笏を持ちて、主上の御前に向ひて立てるが、笏を置きては拜し、笏を執りては又た再拜する、其の拜舞し騷ぐ態の面白さよ。

一條天皇の長保元年六月十四日、内裏炎上し、十六日主上女院の御所に行幸あり。翌二年十月十一日、新造の内裏に遷幸あらせらる、此の新造の内裏を、今内裏と言ふなり。今内裏の



て、定證僧都のえだあふぎにせさせばやとの給ひしを、山しなでらの別當になりて、近衛のづかさにて此君のいで給へるに、高きけいしをさへはきたれば、ゆゝしくたかし。出ゐるのちこそ、など其えたあふぎはもたせ給はぬといへば、ものわすれせずとわらひ給ふ。

東の御門は、朔平門とて北面なれば、其の縫殿の陣をば、北の陣とぞ言ふなる。此の陣に、高き槐の木の立てるを、常に見ながら、其の高さ幾尋あらんかなど言へるに、近衛權中將成信公の申さるゝには、定證僧都は脊の丈高ければ、此の槐の木を根元より切りて、僧都の枝扇にせさせば好からんと言ひ給しことありしが、此の僧都やがて興福寺の別當になりて、其の奏慶に參内せられたる日、成信公は近衛の司なれば、宮門警固の爲めに禁中に參られたるに、定證僧都は脊の高き上に、尙ほ高き足駄やうの履子を穿きたれば、其の高きこと

【五】山は

おぐらやま。みかさ山。このくれ山。わすれ山。いりたちやま。かせやま。ひはのやま。かたさり山こそ、誰に所おきけるにかとをかしけれ。いつはたやま。のちせの山。かさごり山。ひらのやま。ここの山は、わが名もらすなと、みかどの

尋常ならず、奏慶を濟ませて僧都の退出した る後、已れ成信公に向ひて、何故に楢の木の枝扇を、彼の僧都に持たせ給はざりしと申せば、物覺え善き人かなとて、成信公の戯れ笑はせ給へり。

【五】山は

山の有名なるものは、山城國嵯峨にある小倉山、大和國春日の三笠山、このくれ山、わすれ山、又わすれずの山とあるは陸奥なり。いりたち山、山城の鹿背山、ひはの山、これは比叡の山の寫し誤りかとも言ふ。かたさり山これは方去ると言ふ名の可笑しくて、誰に所



よませ給ひけんいとをかし。いぶき山。あさくらやま。よそに見るらんいとをかしき。いはた山。おほひれやまもをかし。りんじのまつりのつかひなど思ひ出らるべし。たむけ山。みわのやまいとをかし。おとは山。待かれ山。玉さか山。耳なし山。すゑのまつやま。かつらぎ山。みのゝおやま。はゝそやま。くらゐ山。きびのなかやま。あらし山。さらしなやま。なばすて山。をしほ山。あさまやま。かたゝめ山。かへるやま。いもせやま。

を讓りて退きたるにやと思はる。越前の五幡山、若狹の後瀬の山、山城の笠取山、近江の比良の山、同じく近江の鳥籠の山は、近江の采女に賜ひたる聖武天皇の御製に、「犬上のとこの山なるいさや川いさとこたへて我名もらすな」とあるも最と面白く、同じく近江の伊吹山、筑前の朝倉山、これは六帖に、「むかし見し人をぞ我はよそにせし朝倉山の雲井はるかに」とありて、朝倉山を外に見るも可笑し。山城の石田山、攝津の大比禮山、三月中の午の日の石清水八幡の臨時祭に、舞人舞を終りて、大比禮といへる歌曲を謠ふなれば、此の

【六】 峰は

ゆづるはのみれ。あみだのみれ。いやたかのみれ。

山の名によりて、八幡臨時祭の勅使の事など思ひ出さる。大和の手向山及び三輪の山も、亦た面白き名なり。山城國清水の音羽山、攝津の待兼山、玉坂山、大和の耳無山、陸奥の末の松山、大和の葛城山、美濃の御山、山城の柞山、飛彈の位山、備中の中山、山城の嵐山、信濃の更科山及び姨捨山、山城のをしほ山、信濃の淺間山、かたゝめ山、越前の歸山、紀伊の妹脊山など、皆其の名高し。

【六】 峯は攝津の楪の峯、山城の阿彌陀の峯、これは今の豐國神社の上にありて、「今よりはあみだの



【七】 原は

たかはら。みかのはら。あしたのはら。そのはら。はぎはら。あはづのはら。な

峯の月かげを千世の坂までたのむべきかな」と、公任卿の詠めるは夫れなり。彌高の峯は、玉葉集に、寛平四年大嘗會の悠紀の方に、近江國彌高山あり。金葉集に、大嘗會の主基の方に、備中國彌高山あり。大嘗會の祭場は東西に分れ、東を悠紀、西を主基といひ、之れが神饌の穀は、預め悠紀主基の國郡を卜定して奉らしむ。此處に見ゆる彌高の峯は、其の近江なると備中なるとの、何れもを言ふなるか。

【七】 原は

大和の竹原、山城の瓶の原、大和國葛下郡の朝の原、信濃の薗原、紀伊の萩原、近江の粟

しはら。うなゐこがはら。あべのはら。しのはら。

【八】 市は

たつのいち。つばいちは、やまとにあまたあるなかに、長谷寺にまうずる人の、かならずそこにとゞまりければ、觀音の御えんあるにやと、心ことなるなり。おふさの市。しかまの市。あすかのいち。

【九】 淵は

津の原、大和の梨原、髻髮子が原、攝津の安倍野原、近江の篠原、此の篠原は、十六夜日記にも見えたり。

【八】 市は

大和の辰の市、椿市は源氏物語にも見えて、大和には市の多くある中に、椿市は長谷寺に詣ずる人の必ず立ち寄る處なれば、長谷の觀音の御緣にてもあるにやと思はれて、別段の心地するなり。おふさの市は、一にをふさの市、又はおふの市ともありて明ならず。播磨の飾摩の市、大和の飛鳥の市など、皆名高し。

【九】 淵は



かしこふち。いかなるそこの心を見えて、さる名をつきけんと、いとをかし。ないりそのふち。たれに、いかなる人のをしへしならん。あをいろの淵こそ、またをかしけれ。藏人などの身にしつべくて。いなふち。かくれのふち。のそきのふち。玉淵。

賢淵、是は如何に深き心の底の見えて、斯くは賢き淵と名づけたるにや、最と面白し。ないりその淵、是は爲尹千首の中に、「つれなくば身をしづめんとかこつ夜のそなたの月よ」と見えたり。如何なる人の誰にいりその淵」と見えたり。其の淵になる入りそと、敎へしならん向ひて、其の淵になる入りそと、敎へしならんと思はれて可笑し。されど青色の淵と言へるものあるも、亦た可笑し。六位の藏人は、青色の袍を着るなれば、此の淵の名は、藏人などの身に釣合ひて面白し。大和の稻淵、是は續古今集に、「年をふる涙かいかにあふことは猶いな淵の瀧まされとや」とあり。此の外、

【十】海は
水うみ。よさのうみ。かはくちのうみ。いせのうみ。

【十一】わたりは
しかすかの渡り。みつはしのわたり。こりすまのわたり。

【十二】みさゞきは

隱れの淵、覗の淵、玉淵など言へる名のものもあり。

【十】海は
近江の琵琶の湖、丹後の與謝の海、攝津大坂の川口の海、神風の伊勢の海。

【十一】渡りは
三河の志賀須香の渡、是は源順の歌集に、「ゆきかよふ舟路はあれどしかすかの渡は跡もなくぞありける」と見えたり。越中の三橋の渡、こりすまの渡は、播磨の須磨の渡なるべしと言ふもあり。

【十二】御陵は



うぐひすのみさゞき。かしはばらのみさゞき。あめのみさゞき。

【十三】いへは
近衛御門。二條一條もよし。そめ殿の宮。せかゐゐん。すがはらのゐん。れんせい院。朱雀院。さうゐん。小野宮。こうばい。あかたのゐど。さう三條。小六條。こ一でう。

大和國春日の若草山の鶯の陵、山城國紀伊郡にある桓武天皇の柏原の陵、あめの陵は、天智天皇の山科の陵なるべし。

【十三】家は
近衛御門なる陽明門、二條の北にして堀河の東なる二條院、一條の南にして大宮の東二町なる一條院、正親町の北なる染殿の宮、正親町の南にして京極の西なる清和院、勘解由小路の南にして烏丸の西一町なる菅原道眞公の舊邸、大炊御門の南にして堀川の西なる冷泉院、三條の北朱雀の西にして西坊城の東なる朱雀院、洞院の西園寺邸、大炊御門の南にし

て烏丸の西なる惟高親王の小野宮、五條坊門の北なる紅梅殿、一條の北にして東洞院の西の角なる縣井戸殿、後撰集に、橘公平の女此の井戸殿に住みて詠める歌「都人きてもをらなん蛙なくあがたのゐどの山吹の花」とあり。二條の南なる東三條、此處は四條天皇御誕生の御殿なり。烏丸の西にして楊梅の北なる小六條院、是は又た北院とも言ふ。近衛の南にして洞院の西なる小一條院、是は又た山吹殿とも言ひて、清和天皇御誕生の所、藤原師尹公の邸なり。大方家の善きは、以上述べたるが如し。



清涼殿のうしとらのすみの北のへだてなる御さうじには、あらうみのかた、いきたる物どものおそろしげなる、手ながあしながをぞかゝれたる、うへのみつぼれの戸おしあけたれば、つれにめに見ゆるを、にくみなどしてわらうほどに、かうらんのもとに、あをきかめの大なるをすゑて、さくらのいみじくおもしろきえだの五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、かうらんのもとまでこぼれさきたるに、ひろつかた、大納言殿さくらのなほしのすこ

清涼殿の北東の隅にて、北を立て限りたる萩の戸の前の布障子を、荒海の障子と申して、荒海の景、恐ろしき動物、さては手長足長などを畫かれたり。主上の御座の傍なる一間は、上御局にて、中宮の御居間なるが、已れ中宮に侍ひて、此の上御局の戸を押し開くるたびに、其の荒海の障子の見えて、手長足長などを憎みなどして笑ひけるが、此方の御局の高欄の許には、青磁の大なる花瓶を据ゑ、枝振り善き櫻の五尺計なるを、瓶一杯に挿し込みたれば、花は高欄に溢れん程に咲き滿ちたるに、畫つ方になりて、關白道隆公の御子大納

しなよらかなるに、こきむらさきのさしぬき、しろき御ぞども、うへにこきあやのいとあざやかなるをいだして、まゐり給へり。うへのこなたにおはしませば、戸ぐちのまへなるほそきいたじきにゐ給ひて、ものなどそうし給ふ。みすのうちに、女房さくらのからきぬども、くつろがにぬぎたれつつ、ふぢやまぶきなど、いろ〳〵にこのもしくあまた、こはじとみのみすよりおし出たるほど、日のおましのかたにおものまゐる、あしおとたかし、けはひなど、ことにいふ聲きこゆ。うら〳〵とのどかなる日のけしきいとをかしきに、はての御はんもたる藏人まゐりて、おものそうすれば、なかの戸よりわたらせ給ふ。御ともに大納言殿まゐらせ給ひて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり。宮の御まへの御きちやうおしやりて、なげしのもとに出させ給へるなど、たゞなにごともなく、よろづにめでたきを、さふろふ人もおもふ事なきこゝちするに、月も日もかはりゆけども、ひさにふるみむろの山のさいふふ言伊周公、此の君は中宮の御兄上なるが、表白く裏赤き櫻の直衣の、心地よげに着馴れたるに、濃紫の糸にて裾を指貫きたる奴袴を穿き、白の御衣を着給ひ、且つ其の上に、濃紅の綾絹の最と鮮麗なるを袖に見せて、此の御局に參り給へり。折しも主上一條天皇、此の中宮の御局に在しませば、大納言は内へも入り給はず、戸口の前なる細き椽の板敷の所に畏まりて、何事かを奏上し奉るに、御簾の中には女房達の表白く裏紫なる櫻の唐衣着たるが、其の着心地の寛ぎたる狀にて、肩の掛りも優なる躰なり。此の外皆春の裝束とて、表は紫、裏は薄紫の藤色の衣、表は朽葉色、裏は黄なる山吹の衣など、各々好みに應じて着たる女房達の袖口が、小半蔀ある御簾の下より、押し出て見ゆるなど、此の一間の有樣、畫にも書きたらんやうなり。既にして晝の御座所、常には日の御座と言ふなるが、此の御座所に御膳を運ぶ藏人などの、足音高き容子にて、其足音を警むる聲の、をし〳〵と言ふが聞ゆるに、殿内の靜粛は推して知らるべく、殿外には麗かに照る春の日の、長閑なる景色面白く、即がて最終の御飯を運べる藏人が、此の御局に參りて、主上に晝の御膳を奏すれ



どをし〳〵といふ聲きこゆ。うら〳〵とのどかなる日のけしきいとをかしきに、はての御はんもたる藏人まゐりて、おものそうすれば、なかの戸よりわたらせ給ふ。御ともに大納言殿まゐらせ給ひて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり。宮の御まへの御きちやうおしやりて、なげしのもとに出させ給へるなど、たゞなにごともなく、よろづにめでたきを、さふろふ人もおもふ事なきこゝちするに、月も日もかはりゆけども、ひさにふるみむろの山のさいふふ

ることを、ゆるらかにうちよみ出してゐ給へる、いとをかしとおぼゆる。げにぞちさせもあらまほしげなる御ありさまなるや。

はいぜんつかうまつる人りのなのこどもなどめすほどもなくわたらせ給ひぬ。御すゞりのすみすれとおほせらるゝに、めはそらにのみにて、たゝおはしますかのみ見たてまつれば、ほどさほきめもはなちつべし。しろきしきしおしたゝみて、これにたゞいまおぼえんふること、ひとつふたつかけとおほせらるゝ。さにゐ給へば、中の戸より日の御座に渡御あらせ給ひ、大納言殿は主上の御供を勤めて、再び中宮の許の彼の櫻を挿したる花瓶の傍に歸り居たまへば、中宮も御前なる几帳を押し除け給ひて、敷居の所まで出でますなど、御心の安らかにて、唯だ何の蟠り一つもなく、萬事泰らけく結構至極なれば、仕へ侍ふ人々も心懸りなく、御世平かに、禁殿靜にして、天長地久の瑞雲たなびき渡れば、大納言の詠み給へる、

「月も日もかはりゆけごもひさにふる御室の山のとこ宮所」

となん言へる舊詠を、物寛ぎて中宮の口ずさみし給へるなど、心ゆたかに



ろに、これにいかにと申せは、さくかきてまゐらせ給へ、なのことはことくはへさふらふべきにもあらすとて御すゞりとりおろして、さく〳〵たゞおもひめぐらさで、なにはづもなにも、ふとおぼえんことをとせめさせ給ふに、なごさはおゝせしにか、すべておもてさへあかみてぞ、おもひみだるゝや。春のうた、花の心など、さいふ〳〵も、上らふ二つ三つ書きて、是にさあるに、

さしふればよはひは老ぬしかはあれど花をし見れは面白くこそ覺ゆれ。此の歌の心は、日月は過ぎ行きて、四季の變遷はあれども、幾久しく年經る大内山の禁殿に、允文允武なる主上陛下と、温厚慈仁なる皇后陛下とは、長へに變はり給はぬを言祝ぎたるにて、實にぞ幾千年も此の儘にて、中宮の御許にあらまほしく思ふことの有り難さよ。

さても主上の御晝飯を召し上りて、陪膳の女房が、其の濟みたる御膳を、藏人などに渡さんとて召し寄する間もなく、主上には早や中宮の御局へ渡らせ給ひて、御硯の墨すれと仰せらるゝに、已れ愼みて墨磨れども、墨には

物おもひもなし。といふことを、君をしみればとかきなしたるを、御らんじて、たゞ此心ばへどものゆかしかりつるぞとおほせらる。ついでに、ゑんゆうゐんの御時、御前にて、さうしにうたひどつかけと、殿上人におほせられけるを、いみしうかきにくゝすまひ申人々ありける。さらに手のあしさよさ、哥のをりにあはざらんをもしらじとおほせられければ、わびてみなかきける中に、只いまの闕白殿の、三位の中將と聞えける時、

心も入らで、唯だ目を空に擧げて、主上をのみ見奉れば、千歳までも此の儘にと、程遠く頼みまつりし中宮の方には目も屆かず。即が墨磨りたれば、白き色紙押し疊みて、之に唯今記臆しつる古歌一二首を書けとの主上の仰せに、簾外に居給へる大納言へ、如何にし侍らんと已れ尋ね申せば、女房達にこそ御下命ありたれ、男の我は助言すべきにあらずとて、大納言自から、主上の御前の御硯を取り下して、疾く〳〵書かれよ、彼れ是れ思ひ連らさで、童子も知れる「難波津に咲くや此の花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」なりと



しほのみついつものうらのいつも〳〵君をばふかくをもふはやわが、といふうたのすゑを、たのむはやわがと、かき給へりけるをなん、いみしくめでさせ給ひけるとおほせらるゝも、すゞろにあせあゆる心ちぞしける。わかからん人は、さもえかくまじきことのさまにやとぞおぼゆる。れいいとよくかく人も、あいなくみなつゝまれて、かきけがしなどしたるもあり。古今のさうしを御まへにおかせ給ひて、歌どものもとをおほせられて、これがすゑはいも、何なりとも、思ひ浮べるものにて宜かるべしと、迫め給ふにぞ、居列ぶ女房達、皆々顔を赧らめ、思ひ亂るゝに、大納言の何どか斯く急かせ給ふにか、されど時節は春なり、花瓶には櫻の挿されたれば、春の歌にて花の心を詠める古歌もがなと、已れ思案を運らす間に、憶して顔を赧らめしとは言ふものゝ、一座の中の上﨟なる女房達より、先づ二つ三つ書きて、次に已れに廻されたれば、染殿の后の御前に、花瓶に櫻の花の挿されたるを見て、后の父君なる忠仁公の詠まれたる、

としふれば齡は老ぬしかはあれど

かにとおほせらるゝに、すべてよろひる心にかゝりておぼゆるもあり。げによくおぼえず、申いでられぬ事はいかなる事ぞ。密相の君ぞ十ばかり、それもおぼゆるのは。まいて五つ六つなどは、たゞおぼえぬよしをぞけいすべけれど、さやはけにくゝ、おほせ事をはえなくもてなすべきといひ、くちをしがるもをかし。しると申す人なきをば、やがてよみつゞけさせ給ふを、さてこれはみなしりたる事ぞかし。などかくつたなくはあるぞといひなげく。中

花をし見れば物おもひもなし

と言へる歌を、今此處にも櫻を挿したる花瓶あるに思ひ寄せ、主上の仰せにて書き認むなれば、「花をし見れば」を「君をし見れば」と書き變へて、其の他は原歌のまゝに認めたるを、主上御覽じ給はりて、「花」とあるを「君」と變へたる作意こそ床しけれと、御感の賞詞を下し賜へり。此の序に、中宮の御物語あらせらるゝには、先々帝圓融院の御時なりき、御前にて冊子に歌一つ書けと、主上より殿上人に仰せられけるに、最と書き苦しくて、辭退する人々ありたれば、主上重ねて、文字の



にも古今あまたかきうつしなどする人は、みな覺えぬべき事ぞかし。村上の御時、せんようでんの女御ときこえけるは、小一條の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、たれかはしりきこえざらん。まだひめぎみにおはしける時、ちゝおとどのおしへ聞えさせ給ひけるは、一には御手をならひ給へ、つぎにはきんの御ことを、いかで人にひきまさんとおぼせ、さて古今の歌二十卷をみなうかべさせ給はんを、御がくもんにはせさせ給へとなん聞えさせ給ひ

書き振りの上手下手は、たとひ歌に折合はずして見苦しくとも、差支あるべからずと仰せられければ、皆々惡筆を御詫び申し上げて書きける中に、我が父君なる今の關白道隆殿が、其の當時三位中將にて、

潮の滿ついつもの浦のいつも〳〵
君をば深く思ふはやわが

と言へる古歌の結句を、「頼むはやわが」と書き變へ給へり。此の歌の一句二句は、いつも〳〵と言はん爲めの序詞にて、一首の意は、常に君を深く思ふ者は我なりとの戀歌なるが、「思」ふを「頼む」と變へて、主上を長へに頼み

けると、きこしめしおかせ給ひて、御物いみなりける日、古今をかくしてもてわたらせ給ひて、例ならず御きちやうをひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御さうしをひろけさせたまひて、そのし其月なにのをり、その人のよみたるうたはいかにとさひきこえさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもをかしきもの丶、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべきこと丶、わりなくおぼしみだれぬべし。其がたおぼめかしから奉る心を述べられたれば、御感斜ならざりしとて、今已れが「君をし見れば」と書き變へたるを、褒めさせ給へる中宮の御物語に、漫らに耻かしく思はれて、流汗淋漓たるを覺えずになん。尤も「年ふれば齡は老ぬ」との古歌そのまゝを書きたるは、已れ年寄りたればこそ書きたれ、若き人は書き得まじき歌のさまなるべしと思はる。斯くて色紙に書き認めたる中に、例は善く書く人も、今日は主上の御前なれば、心ならずも憚りて、却りて書き損じなどして、色紙を汚したるもありき。さて夫れより古今和歌集を、中宮の御前に置



ぬ人、二三人ばかりめしいでて、ごいししてかずをおかせ給ひんとて、きこえさせ給ひけんほど、いかにめでたくをかしかりけん、御前にさふらひけん人さへこそうらやましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがてすゑまでなどはあられど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかでなほすこしおぼめかしくひがこと見付てをやまんと、れたきまでおぼしける。十卷にもなりぬ、さらにふようなりけりとて、御さうしにけうさんして、みとのごもりかせ給ひて、歌の上の句を仰せられて、下の句を侍ふ女房達に言はせ給ふに、其の仰せらる丶歌の中には、夜晝心にかけて覺えしものもあるに、いざとなれば善くも思ひ出さず、御答申し上げ兼ぬるこのあるは如何なる故にや、いと無念に思はれて悔し。中宮の官女の上藺にて、富小路左衛門佐重輔の御女なる宰相の君は、中宮の仰せられたる歌の中にて、十首ばかり御答申せしが、是は覺え善き方にて、其の他の女房達は、五つ六つなどなれば、寧ろ記臆つかまつらずと啓し申すべきなれど、左樣にては氣色を惡くし、折角の仰せ事を無

ぬるも、いとめでたしかし。いと久しうありておきさせ給へるに、なほこのこと、さうなくてやまんいとわろかるべしとて、下の十卷を、あすにもならば、ことをもぞ見給ひあはするとて、こよひさだめんと、おほとなぶらちかくまゐりて、夜ふくるまでなんよませ給ひける。されどつひにまけきこえさせ給はずなりにけり。うへわたらせ給ひてのち、かゝることなんと、人々殿に申たてまつりければ、いみじうおぼしさわぎて、御すぎやうなどあまたせさせにする譯なれば、恥を忍びて御答申し上げたりとて、殘念がるも面白し。さて此の下の句は、誰も知らずと申し上ぐる歌をば、即がて順々に中宮の讀み給ふを聞き侍れば、何ぞ計らん、其の歌は皆々知りたるものなるに、なぜか斯く物覺えの惡きやとて、女房達と共に言ひ嘆くに、中宮の仰せらるゝには、和歌集の多くあるが中にも、殊に古今集の歌は、書き寫しなどして、善く覺え置くべきものなり。其の一例を話せんに、村上天皇の御時、宣耀殿の女御なる芳子と申さるゝは、小一條左大臣師尹公の御女なれば、何人も此の女御を知



給ひて、そなたにむかひてなんれんじくらさせ給ひけるも、すきゞしくあはれなることなりなど、かたり出させたまふ。」うへもきこしめして、めでさせ給ひ、いかでさおぼくよませ給ひけん、我は三まき四まきだにもえよみはてじとおぼせらる。むかしはえせものもみな、すきをかしうこそありけれ、このごろかやうなることやはきこゆるなど、御まへにさふらふ人々、うへの女房のこなたゆるされたるなどまゐりて、くちゞいひいでなどしたるほらぬ者はなかるべし。此の女御、未だ村上天皇に仕へまつらざる前にて、尙ほ姫君にて在しける時、父の左大臣師尹公の教訓三ケ條あり。一には手習、二には七絃の琴、此の二つを人に勝れんとこそ勵め。三には古今集二十卷の歌を暗誦するを學問とせよとなり。之を村上天皇の聞しめされて、芳子の女御となり給へる後、或る日、天皇御物忌にて、徒然なる折しも、女御の御方へ渡らせられ、古今集を隱し持ち給ひて、例になく御几帳を引き寄せて立て給へるにぞ、常に變はりて怪しき事し給ふものかなと、女御の思しける間に、早

どは、まことにおもふことなくこそおぼゆれ。

や古今集を繙き給ひて、其の年其の月如何なり折に、其の人の詠みたる歌は、何と言ふぞと問はせ給ふに、さては主上の、古今集にて我身を試し給ふなりと、女御の心付かるるものから、若し覺え違へなどし、或は忘れたるもあらんには由々しき大事なりと、定めて心遣ひせられたるなるべし。さるを主上には、古今集の歌を善く覺えたる女房二人三人召し出されて、女御の言ひ當てられたるを、碁石にて數取りせさせんと仰せられけるこそ、如何に面白く珍らしかりけん事よと、中宮の物語らせ給へば、斯る面白き場合に、其の當時



御前に侍へる人さへ羨しく思はる。中宮尙も語り續け給ふには、さて夫れより强ひて古今集の歌をば、女御に問はせ給へるに、賢こげに一首毎を末の句まで申させ給はで、最と上品に御答申されたるが、一として覺え違ひもなく、又た忘れたるもなければ、主上にも如何にしてか女御の不覺なる所を見付け出さずば止まじとまで、其の記臆の善きを妬ましく思し召されて、問ひ進ませ給ふ程に、早や十卷に至りぬれば、今は此れ迄なり、此の上は問ふとも不用なりと仰せられて、其の問ひ切られたる處に、境算とて竹札を挾み置かれて、

御寢に就かせ給ひたるこそ芽出度かりけれ。

さて久しくして後起き給へるに、尙ほ古今集の事、殘りの半分を其の儘に差し置くは宜しからず、明日にもならば下の十卷を、異本と見合はせて、女御の密かに內稽古せんも計るべからず、若かず今夜の中に、殘りの全部を試し定めんにはと思しめされて、夫れより更に大殿油とて、油の御燈火を近く點して、深夜まで讀み問はせ給へり。されど女御には、一首とても負け給はざりけり。此の時殿中の人々は、主上の女御の御方へ渡御ありて、唯今古今集の問答を試みられ侍りと、女御の父



君なる師尹公へ申し奉りけるに、師尹公甚く心配あらせられて、覺え違へ失念などなきやうにと、讀經祈禱し給ひ、宣耀殿の方に向ひて、一心に祈願を籠められけるも、亦た其の物に深く熱心なる師尹公の奇特さは、感ずるに餘りありと、最と面白く中宮の御物語らせ給へり。之を聞こしめし給へる主上の、叡感斜ならずして仰せらるゝには、天曆の帝の左程まで根氣强く、能くも廿卷全部を讀ませ給ひしものかな、朕は三卷四卷ばかりにても讀み果てえじとて、感嘆あらせ給ふ。されば中宮の御前に仕へ侍ふ女房達を始めとし、主上

おひさきなくまめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は、いぶせくあなづらはしくおもひやられて、

の御方の女房達にて、中宮の御前へも出ることを許るされたる人々など集まりて、昔は宣耀殿の女御の君など高き人々を始め奉り、卑賤者さへも皆々熱心にて、數寄こそ物の上手なれとの諺のやうに、其の記臆力も強かりけめ、此頃に至りては、皆々斯くも物覺え惡くなりたるよと、口々に言ひ出でなどしたる狀の、和氣靄々として春風堂に滿つるほどに、誠に齷齪と思ふ所もなく、心安らかなるこそ有り難き極みなれ。之に付きても想ひ出すは、世の女子達の身の上にて、行く先の樂もなきに、心ならずも甲斐性なき男を夫として、孜



猶さりぬべからん人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のなかのありさまも見せならはさまほしう、內侍などにてもしばしあらせばやとこそおぼゆれ。みやづかへする人なば、あはあはしうわろきことに思居たる男こそいとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし、かけまくもかしこきおまへなはじめ奉り、上達部殿上人四位五位六位女房はさらにもいはず、見ぬ人はすくなくこそはあらめ、女房のすんざども、そのさよりくるものども、なさめ、みかはやゝ營々と味氣なき年月を送るは、外の見る目にも心塞ぎて、侮り蔑むべき心地せらるれば、然るべき人の女子達は、宮仕せさせて、我等と共に禁中に入り交らせ、廣く世の有樣をも見知らしめま欲しうて、暫時にても從五位相當の內侍を勸めしめばなど、已が宮仕の心安らかなるに付けて思ひ出さる。さるを宮仕する女房達は、淡々しくて沒趣味なりと、惡しざまに思ひなす男あるは、口惜しきことなりされど斯く思ふも、亦た無理ならぬ所あり。掛まくも畏き一天萬乘の君の御前を始め奉り、三位以上の公卿なる上達部、昇殿を聽された

うど、たびしかばらといふまで、いつかはそれをはぢかくれたりし、とのばらなどは、いとさしもあらずやあらん。それもあるかぎりはさぞあらん。うへなどいひてかしつきすゑたるに、心にくからずおぼえんことわりなれど、内侍のすけなどいひて、をりをりうちへまゐり、まつりのつかひなどに出たるも、おもだゝしからずやはある。さてこもりゐたる人はいとよし、すりやうの五せちなどいだすをり、さりともいたうひなび、見しらぬこと人にとひる四位五位六位の殿上人、さては女房達は申すに及ばず、我身の見らるゝ人甚だ多く、更に女房達の召使女、或は此等女房達の家里より來る人々、禁中の下司の老女、不淨物を扱ふ御厠人、其の他礫瓦にも喩ふべき數ならぬ賤しき者にまで見らるゝとも、何どか耻ぢ隱れしつべき、又た之を一々耻ぢ隱れんには、宮仕も爲えまじきなり。されど殿原に對しては、耻ぢ隱るゝこともあれば、左程にも見らるゝことなけれど、さりとて禁中に侍るからには、大方見るにてぞあらん。一人娘の世間知らずに家にのみ打ち籠り居る者とは、固よ



きくなどはせじと、こゝろにきくものなり。

り同日の論にはあらず。されば奥方として、大切に家に据ゑたる妻の、多くの人に見馴らされたりと思はゞ、餘り善き心地もすまじきは道理なれど、一方には又た、過ぎし官名の内侍佐など言ひて、折々は禁中へ參内し、或は賀茂の祭の御使に立つなどするは、榮譽ある面目ならずとせんや。されば一たびは禁中に籠り居て、從四位相當の典侍などの女官を勤めたる人の、後に緣付きたるは最と善きものにて、十一月中の丑の日、主上常寧殿に渡らせ給ひて、五節の舞姫を御覽あるに、公卿よりも受領の國守よりも、其の舞姫を出すな

るが、受領などは其の任國に住み居て、禁中の事に疎ければ、折角出したる舞姫も田舍臭くて、作法儀式の萬端に見知らぬ事多く、一々人に問ひ聞くなどの不作法もあるべけれど、其の受領の奥方にして宮仕したる人ならんには、五節の事も善く知り行へば、何の不作法もなく、又た鄙卑たる風もなくて、心床しきものなれば、然るべき家の女には宮仕せさせて、儀式萬端の一通りは覺え置かしめたきものなり。

## 卷の二 十四より二十までの七段より成る



【十四】 すさまじきもの

ひろほゆる犬。春のあじろ。三四月の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶや。火おこさぬ火をけ、すびつ。うしにくみたるうしかひ。はかせのうちつゞきによしうませたる。かたゝがへにゆきたるにあるじせぬ所。ましてせちぶんはすさまじ。」人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそはおもふらめども、されどそれはゆかしきことをもかきあつめ、世にあることをきけばよし。」人のもとにわざときよげにかきたてゝ

【十四】 すさまじきもの

時過ぎて似合はしからぬもの、興醒めて面白からぬもの、氣に向かずして好ましからぬもの、荒涼索寞として物凄きものなどは、皆すさまじきものなり。夜を守りて怪しき物に吼るを其の分とする犬の、晝濫りに吼るは好ましからず。網代は冬の時節に氷魚を捕るものなるに、春になりて網代を用ふるは興なし。寒中に扇を用ひ、老女の化粧したるなども、亦た此の類なり。表は紅色、裏は紫の紅梅の衣は、十一月より二月までの物なるに、三月四月になりても尚ほ用ふるは、時候遲れの似

やりつる文の返事見ん、今はきぬらんかしと、あやしくおそきさまつほどに、ありつる文のむすびたるも、たてぶみも、いときたなげにもちなしふくだめて、うへにひきたりつるすみさへきえたるを、おこせたりけり。おはしまさゞりけりとも、もしは物いみとてさりいれずなど、もてかへりたる、いとわびしくすさまじ。」又ならずくべき人のもとに、車をやりてまつに、入くるおとすれば、さなゝりと人々出て見るに、くるまやどりに入て、ながえは合はしからず。乳呑兒の死失せて、不用になりたる産室は、無きに若かずと思はれて、有るも甚だ不似合なり。火鉢、爐などは、火を起す爲めの物なるに、火も起さで寂しげなるは惡し。諺に火の無き炬燵とて、物寂しきを形容するも是れなり。鴨長明の無名抄に、「火おこさぬ夏のすびつの心地して人もすさめず冷しの世や」と詠みしを、夏なれば未だしも、冬ならば如何に冷からんと、童女の難じたる事あるも同じ心なるべし。牛飼は其の牛を愛すべきに、然はなくて憎し氣に扱ふなど。學問の家柄にて、代々博士の打ち續くべき所へ、



うちうちおろすを、いかなるぞとへば、けふはおはしまさず、わたり給はずとて、うしのかぎりひき出でいぬる。」又家ゆすりてさりたるむこのこず成ぬる、いとすさまじ。さるべき人のみやづかへするがりやりていつしかとおもふもいとほいなし。ちごのめのとの、ただあからさまとていぬるを、もとむれば、とかくあそばしなぐさめて、とくこさいひやりたるに、こよひはえまゐるまじとて、かへしおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわ用もなき女子の生れて、學問を繼ぐべき男子の絶えたる。或は行かんと思ふ方角の塞りたれば、方違へとて、一と先づ異なれる方角に行きたるに、其の行先にて饗應するが禮なるを、そを怠りて待遇さゞる。殊に節分の時の方違へに饗應せざるは、更に興なくて冷し。遠國より寄來したる文の中に、志とて包みたる物のあるは嬉しきに、唯だ文ばかりなるは好ましからず。京より遠國に遣る文にも、包み物のなきは、定めて先方にても興無く思ふらめど、京よりの便りには、戀しく懷かしき事の數々を書き集め、世間の珍らしき事柄な

りなし。」女などむかふるをさこ、ましていかならん。」まつ人ある所に、夜すこしふけて、しのびやかに門をたたけば、むれすこしつぶれて、人出してとはするに、あらぬよしなきものゝ、なのりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへす〳〵すさまじけれ。」けんざの物のけてうずとて、いみじうしたりがほに、さこやずゞなどもたせて、せみこゑにしぼり出しよみゐたれど、いさゝかさりげもなく、ごほうもつかれば、あつめてれんじゐたるに、男ど、其の文によりて耳新しく聞くものから、たとひ包み物はなくとも、心を慰さむるに充分なり。將た又た同じ京の人の許、或は程遠からぬ友達の許へ、わざ〳〵念を入れて奇麗に書きたる文を遣りて、其の返事如何にと待つ間の長くて、使の者の歸り來ん遲さを、怪しみて侘びつる程に、やう〳〵使の者の歸り來たれど、持たせ遣りし文の、卷きて其の端を折り結びたる結文も、杉原、鳥の子などの全紙を用ひたる堅文も、穢く持ち扱はれて、揉み摩れ毛ばみ、封じ目の墨も消えたるを持ち歸りて、先方の人は留守にてありし、若く



も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみこうじて、さらにつかずたちれとて、ずゞとりかへしてあれど、げんなしやとうちいひて、ひたひよりかみざまに、かしらさぐりあげて、あくびをおのれ打して、よりふしぬる。

は物忌に籠り慎み給ふとて、文を受取り給はずなど言へるは、誠に殘念至極のすさまじとも凄まじ。又た必ず來るべき人を、車もて迎へに遣るに、待つ間程なく車の入り來る音のすれば、然なり其の人なりとて、皆々出迎へて見るに、何ぞ圖らん其の車を藏めて、轅を下すなれば、如何なる譯ぞと主人の問ふに、今日は御留守にて御來車あらせずと答へて、牛のみを引出して歸る狀の、寂しく興なきものなり。又た一家擧りて迎へ取りたる聟が、末遂げずして通ひ來ずなりたるは、最とすさまじく好ましからず。殊に其の聟の、然るべ

き宮仕の女房の許に通ひ行くものから、再び此方に思ひ通はんは、何時しかとも計られずなど思ふも、誠に本意なく興醒めて冷たし。稚兒の乳母が、暫時の間なりとて他行したる後に、稚兒の其の乳母を探し求むれば、彼れ是れ遊ばし慰めなどする間に、使を遣りて早く歸り來よと促せば、今夜は歸り得まじと答へて、迎への使を返へし來れるは、雷に本意なきのみならず、道理はづれて憎ましく思はるるなり。但し乳母を迎へに遣りたるにても、斯く本意なければ、況して我が思ふ女を呼びに遣りて待つ男の、其の女の來ざる時の心地



は、如何に本意なからんかと、察せられて哀れなり。更に又た人と約して、其の人の來るを待てるに、夜少し闌けて、忍びやかに門を叩く音のすれば、さては待つ人の來りつるよと思はれて、聊か心騷ぎするまゝに、下婢をして其の人なるかを尋ねしむれば、思ひもかけぬ用なき者の、名乘りて來れるこそ、興醒むるものゝ中にも、取り別けて斯くも興醒めなるすさまじきものはあらじかし。

又た驗者が、病人の妖邪を調伏して惡魔を拂ふとて、甚く誇り顏に、獨鈷や珠數などを弟子に持たせて、一心に迫聲を絞り出して、苦

しげなる大聲に、陀羅尼なり呪文なりを讀み擧げて祈禱すれど、少しも妖魔の去るべき氣色もなく、護法調伏の効驗もあらねば、病人の一家親族を集めて念じゐたるなれど、滿座の男女皆其の効驗なきを怪むに、餘りに時久しく聲張り擧げたるものから、今は驗者も讀み疲れて、弟子に向ひて言ふやう、護法の驗更になければ立ち退けよとて、持たせたる獨鈷球數などを取り返へし、効驗なしと獨言しながら、最と手持不沙汰をる狀して、已が額を撫で上げ、頭を搔き摩り、如何にも倦みたらんやうに大なる欠して、其處らあたりに寄



ぢもくにつかさえぬ人の家、ことしはかならずときゝて、はやうありしものどものほか〳〵なりつゝ、かたゐなかにすむものどもなど、みなあつまりきて、出入車のながえもひまなく見え、物まうでする供にも、我も〳〵とまゐりつかふまつり、物くひ酒のみのゝしりあへるに、はつゝあかつきまで、かどたたくおとも せず、あやしなどみゝたてり臥したるぞ、誠に不都合至極のすさまじさなる。

さて毎年正月、除目として國司任官などの撰定あらせらるゝに、去年の除目に任官漏れになりたる人の、今年は必ず受領の御沙汰あるべしと聞くからに、昔し家人なりし者にて、今は外に出で行きて、常には訪ひ來ざる者を始めとし、或は遠く片田舎に離れ居る者などまで、蟻の甘きに集まるが如く、舊主任官の曉には、其の下役に取り立て貰はんとて、先を爭ひて羣り來り、出入する車の轅に迄も取り縋れば、轅の隙間なきまでに人手もて塞がり、

ゝきけば、さきおふ聲々して、上達部などみな出給ふ。ものきゝに宵よりさむがりわなゝきをりつるげすをのこなど、いとものうげにあゆみくるを、をるものどもはとひだにもえとはず、外よりきたるものどもなどぞ、殿は何にかならせ給へるなどとふ。いらへには、なにのぜんじにこそはと、かならずいらふる。まことにたのみけるものは、いみじうなげかしとおもひたり。つとめてになりて、ひまなくをりつるもの、やう〳〵ひとりふたりづゝすべ

物詣でせんとすれば、我も〳〵と附き從ひて御機嫌を取り、正月九日より外官の除目の始まりぬれば、前祝なりとて物を食ひ酒を飲み、任官の御沙汰を今か〳〵と勇み待つに、此の除目の詮議は、三日の間行はるゝ事なるが、其の最終の日の夜明くるまでも、門を叩きて任國の吉左右を告げ知らする音もせざれば、此は怪しやなどゝ疑ひつゝある折しも、耳欹てゝ聞くものは何ぞ、止みなんかな警蹕の聲々嚴めしく、今しも除目濟み果てゝ、三位以上の公卿なる上達部など、皆々禁中より退出せらるゝ所なり。事茲に至りては待つ甲斐な



り出ぬ。ふるきものゝ、さもえゆきはなるまじきは、來年のくにぐを、手ををりてかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。

く、宵の中より吉左右いかにと、禁中へ聞きに遣りたる下男の、まだ正月餘寒の頃なれば、終夜寒さに震ひ戰きつゝありしが、主人の除目に漏れさせ給へるに落膽して、力も無く氣も失せたるやうにて、とぼ〳〵と歩み歸れば、今現に家人たる者などは、夫れと察して氣の毒がり、樣子は如何にとも問ひもえせざれど、唯だ臨時に外より追從し來れるもの等のみ、已が利害の急がれて、主人は何國の受領にならせ給ひしやなど問ふに、彼の下男の腹立たしく答ふるやう、某の國の前司にこそはなり給ひつれと。此は前に國司たりしが、任滿ち

て京に歸りたるに、此度の除目に漏れたれば、斯くは前の國司たりし名を言ふなること、任國を得ざりし家の下男の、千篇一律の返答なり。されば主人の信賴を受けて、心から忠實なるものは、其の場限りの追從者の如く、左程には嘆き悲まぬものと思はるゝなり。さて除目濟み果てたる早朝より、彼の外來の其の場限りの追從者等は、一人減り二人減りて、次第々々に退散しぬれど、中にも古き緣故の老人等は、左まで薄情にも見捨て歸る譯にもならず、來年國司の任滿つる國々を指折り數へて、次回こそは必ず受領し給はんなど言ひ



よろしうよみたりとおもふ哥を、人のもとにやりたるに、返しせぬ。」けさうぶみはいかがせん。」それだにをりをかしうなどある、かへりごとせぬは心おとりす。」又さわがしうときめかしきところに、うちふるめきたる人の、おのがつれ〴〵といとまあるまゝに、むかしおぼえて、ことなる事なきつゝ、緩かに歩みながら、歸路に足を向くる狀の、任國を得ざりし此の家の人々には、如何に心痛はしく、本意なき限りなるらんとぞ思はる。

自から秀歌を詠み得たりと思ひて、之を人の許に送くるに、其の返歌なきは興なし。但し懸想したる人に遣る艶書は、若し先方にて靡く心なくば、返書せぬも道理なれば、不都合なりと言はんやうもなし。尤も折面白き雨の夜、雪の朝の景色など、言ひ遣る夫れだにも、返書せぬは不快なるものなり。又た時運に際會ずして、世に古めきたる人が、閑散徒然なる

哥よみしておこせたる。」物のをりのあふぎいみじと思ひて、心ありとしりたる人にいひつけたるに、其日になりて、思はずなるゑなどかきてえたる。

うぶやしなひ、うまのはなむけなどのつかひに、ろくなどとらせぬ。」はかなきくに任かせて、過ぎし昔の榮華を追想し、今を盛りの世に時めきたる人の許に、別段是れぞと言ふ程のものならぬ歌を詠み遣りたるは、いと似つかはしかぬ事なり。或は祭の物見などに持つべき扇の、晴の場所の大事なればと、斯る事には注意深くて、扨目もなしと思ふ人に誂へたるに、祭の日になりて出來上りたるが、見れば豫期に違ひて、意外に惡き畫など書かれたるも、今更ら誂へ直す間暇もなきぞ、興醒めて本意なき業なる。

產養ひとて、產所の三ケ夜五ケ夜などに祝儀の贈物する時、又は送別に臨みて馬の鼻向とて、餞別の品を贈り來る時、其の使者に褒美の品を與ふるは例にて、使者も斯る時こそと豫期し居るに、何物も取らせぬはすさまじ。尤も五月五日の端午の節句に、藥玉とて菖蒲の飾り花など、若くは正月上の卯の日に卯槌とて、年中の惡鬼を攘ふなる杖の、五色の絲にて卷きたるなどを、贈り來る使の者にも、必ず褒美の祿を取らすべし。卯槌、藥玉などの使は、祿あるべしとも思ひ懸ぬことなれど、思ひ懸ぬ時に褒美を得たるは、一層興ありて嬉しと思ふなるべし。さるを今日の使は、必ず祿を得べきぞと思ひ定めて、如何なる物を



すたま、うづちなどもてありく物などにも、猶かならずとらすべし。思ひかけぬことにえたるなば、いと興ありと思ふべし。これはさるべきつかひぞと、心ときめきしてきたるに、ただなるは。まことにすさまじきぞがし。

むことりて四五年まで、うぶやのさわぎせぬところ。」おとなる子どもあまた、ようせずはうまごなどもはひありきぬべき人の、おやどちのひるねしたる。かたはらなる子どものこゝちにも、おやのひるねしたるは、よりどころなくすさまじくぞありし。」れおきてあぶるゆは、はらだゝしくさへこそおぼゆれ。」しはすのつごか授け給ふらんと、胸騒ぎさせて來りつるに、何物も與へずして空しく歸さんは、誠に興醒めて不都合千萬なり。

智を迎へて四五年も經つに、今に子の生れずして、産室の用意の騒ぎもせざるは、相應からぬ心地するなり。又た年長じたる小供多くありて、若くは匐ひ歩きする孫さへある程の人の親達が、安閑として晝眠したる狀の冷淡なるは、如何に物寂しきものなるよ。其の側に手持不沙汰なる兒供等の、兒供心にも頼りなく思はれて、最とすさまじくありぬべし。或は寢起きて直ぐ湯浴するは、極めて不快な



もりのながあめ」一日ばかりのしやうじんの、けだいとやいふべからん。」八月のしらがされ。」ちあへず成ぬるめのと。

【十五】たゆまるゝ物

るものなれば、之を強ひられたる時ほど、すさまじと言はんよりは、寧ろ腹立たしく覺ゆるはなかるべし。十二月の晦日に雨降り止まで、元日までも晴まじく思はれたる。僅に一日の精進を懈怠して、慎み守らざる。皆すさまじかるべし。或は寶治百首に、俊成卿の歌とて、「夏來れば衣がへして山賤の卯の木垣根もしらがさねたり」とありて、白重は四月朔日の更衣のものなるに、八月に白重を着たるは、時候違ひにてすさまじく、乳の出足らぬ乳母も、亦たすさまじきものなれ。

【十五】たゆまるゝ物

さうじの日のおこなひ。日とほきいそぎ。寺にひさしくしもりたる。

【十六】 人にあなづらるゝ物

家のきたおもて。「あまり心よきを人にしられたる人」とし おいたるおきな。」又あは〳〵しき女。」ついぢのくづれ。

精進潔齋の日の勤行は、懈怠すべきものならねども極めて懶く、倦み弛みて退屈するものなり。又た日數遠く何時までも長引く用事。寺に久しく籠りて徒然なる。皆心弛みて退屈するものなり。

【十六】 人にあなづらるゝ物

家の南面は晴の正面なれば、奇麗にして非難すべきやうもなけれど、北面は裏なれば、大方は取り亂しなどして、心ある人の侮りを受くるものなり。又た餘り心好き人なりと知らるゝ者は、人より馬鹿にせられ易く、高齡長壽の老翁は、世の尊敬を受くべき筈なるに、



【十七】 にくきもの

いそぐことあるをりに、長ごとするまらうと、あなづらはしき人ならば、のちになどいひても、おひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。すゞりにかみのいりてすられたる、又すみのなかに石こもりて、ぎし〳〵ときしみたる。」にはかにわづらふ人のあるに、げんざもとむ却りて此の老耄爺などゝ侮られ、心淺くて淡〳〵しく愼み少き女、築土の塀の破れ崩れたるなど、見苦しくて人に侮らる。

【十七】 にくき物

急ぐ用事あるに、長物語する客人ほど憎きはなし。それも心易く下樣なる人ならば、後にゆる〳〵物語らんと言ひて、追ひ返へすべけれど、左樣なる無禮も、耻がましくて言ひ出すべくもなき人の、心なくも長物語するは、いと憎し。

硯に髮の毛の入りたるを知らで、墨磨りたるは、新撰六帖に爲家卿の歌とて、「する墨にま

るに、れいある所にはあらで、ほかにある、たづれありくほどに、まちどほに久しきを、からうじてまちつけて、よろこびながらかぢせさするに、此ごろものゝけにこうじにけるにや、ゐるまゝにすなはちれぶりごゑになりたる、いとにくし。」なんてうことなき人の、すゞろにえがちに物いたういひたる。」火をけすびつなどに、手のうらうちかへし、しはおしのべなどして、あぶりをるもの、いつかはわかやかなる人などのさはしたりし、おいばみうつはれかゝる落髪のとかくに物のうるさきも憂し」とある如く、煩さく憎きものにて、又た其の墨の中に石ありて、磨る音のぎし〳〵と軋みたるも、亦た憎し。

急病人ありて驗者を尋ぬるに、常時の所には居らずして他出したれば、それを搜し歩く間の待ち遠けれど、止むことを得ずして久しく待つに、やう〳〵にして驗者の來りたれば、早天に雨か地獄に佛を得たる心地して、悅び迎へながら加持祈禱さするに、日頃の邪妖調伏に倦み疲れたるにや、座を占めると同時に、陀羅尼など讀む聲の、早や眠たげになりたる



たてあるものこそ、火をけのはたにあしをさへもたげて、ものいふまゝにおしすりなどもするらめ、さやうのものは、人のもとにきて、ゐんとする所を、まづあふぎしてちりはらひすてゝ、ゐもさだまらずひろめきて、かりぎぬの前下ざまに、まくりいれてもゐるかし。かゝることは、いひがひなきものゝきはにやとおもへど、すこしよろしきものゝ式部太夫するがのぜんしなどいひしが、させしなり。」又さけのみて、あかきくちをさぐり、ひげあるものは、待ちし甲斐もなくて最と憎し。

何條事なく、さして學問も故實も知らざる人の、漫りに心得顏して、大言壯語したる、之も亦た憎し。

火鉢又は爐などに暖りて、掌を打ち反しては又た打ち反し、手の甲の皺を押し伸ばしなどしながら焙りゐる狀の、如何に憎々しげなるよ。年若き者は、曾て斯樣なる事する人もなし、年老いて耻かしげなく、愼み心を失ひたる者こそ、斯る擧動するなれ。未だ夫れのみならず、爐の緣側に足を持ち上げ、物言ひつゝ其の足にて爐を押し擦り遣るなどの、不謹

それをなでて、さかづき人にさらするほどのけしき、いみじくにくしとみゆ。又のめなどいふなるべし、身ぶるひをし、かしらふり、くちわきをさへひきたれて、わらはべのこうどのにまゐりてなど、うたふやうにする。それはしも、まことによき人のさし給ひしより、こゝろづきなしとおもふなり。」物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、つゆばかりの事もゆかしがり、きかまほしがりて、いひしらぬをばえんじそしり、又わづかにきゝわたる事を慎なるもあり。斯る業をする者に限りて、他人の家に來りても、已が座を占めんとする所を、先づ扇子にてぱた〳〵と塵打ち掃ひ、さて座を占むると同時に、未だ居定りもせずして、大廣がりに廣がる狀の傍若無人なるに、着たる狩衣の前裾を、下ざまに卷き込めたるなど、不作法極まりなし。斯る擧動は、下賤なる者の分際とのみ思へるに、聊か上流に位する駿河の前司式部太夫など言はるゝ人にして、而かも斯る事ありしは、最と憎からずや。酒を飲みて唇を手にて拭ひ、口髭ある者は其の髭を撫で摩りて、さて其の盃を人に勸むる



ば、われもさよりしりたる事のやうに、こと人にもかたりしらべいふもいとにくし。」物きかんとおもふほどになくちごの。」からすのあつまりてとびちがひ鳴きたる。

などの容子は、憎しげに見ゆるものなり。又た醉ひたる上に強ひられたればにや、之を辭するに身震ひして見せ、頭を左右に打ち振り、剩へ口脇を引き下げて、謂ゆるべそ口する狀は、恰も兒童の貴人の前に出でゝ悲み訴ふるが如くなるは、卑賤の者のすることなるべきに、然はなくて身分高き人の、左樣にし給へるを目擊したれば、誠に見苦しく不似合なる事と思はるゝなり。

我身の分を忘れて物を羨み、徒らに身の不運を歎き悲み、濫りに他人の善惡を評するを好み、些細なる事をも其の實を知らま欲しく、

しのびてくる人、見しりて吠ゆる犬は、うちもころしつべし。」さきまじうあながちなる所に、かくしふせた

又た聞かま欲しくて、已が知らずして言ひ得ざる事は、之を知れる者を怨み誹り、此の頃僅に聞き齧りたる事をば、昔より知りたるやうに吹聽して、知らぬ他人にまでも講釋する狀の、如何にも憎氣なるは心憂きものなり。人の物語るを聞かんとする時、乳兒の泣き叫ぶは憎し。

幾羽とも知れぬ多數の烏が、飛び交ひて鳴きたるも亦た憎し。

夜闌けて、待つ人の忍び來るを、見知りたる人なれば、犬の嬉し鳴きに吼ゆるを、忍び男ありと人に知られんことの心もとなくて、其



る人の、いびきしたる。」又みそかににしのびてくる所に、ながえぼしして、さすがに人に見えじと、まごひ出るほどに、物につきさはりて、そよろといはせたる、いみじうにくし。」いよすなどかけたるをうちかつぎてさら〳〵とならしたるもいとにくし。もかうのすぞ、ましてこはき物の、うちおかるゝいとしるし。それもやをらひきあげて、出入するはさらにならず、又やり戸などあらくあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるは、なりやは

の犬を打ち殺さま欲しき迄に憎し。斯く忍び來る人を無下に歸しもならず、さりとて寢さすべき所ならねど、止むを得ざる場合なれば、兎角に隱し寢させたるに、其の人の心なくも鼾かきたる。さては密かに忍び來る所に、仰々しくも立烏帽子など着たれば、其の歸るさには、流石に人に見られまじと、彷徨き迷ひて出づる程に、其の烏帽子を物に突き觸らせて、颯然と音を起てたる。或は伊豫簾などの掛けたるを氣付かずして、頭に打ち被きたれば、さら〳〵と鳴りたる。又は帽額簾とて、伊豫簾に緣取りしたるは、强張りたるものな

する、あしうあくれば、さうじなどもたほめかし、ごほめくこそしるけれ。

れふたしとおもひてふしたるに、蚊のほそこゑに名のりて、かほのもとにとびありく、はかざさへみのほどにあるこそいとにくけれ。」

れば、之を引き被きて落したるは、更に音高し。尤も靜に引き上げて出入すれば、音も起たねど、用意惡ければ斯る仕損じあるこそ、最と憎くけれ。遣戸を引き開くるにも、少し持ち上ぐるやうにすれば鳴りもせざるを、荒々しく開くれば、障子などにても、敷居に行き詰りて打ち撓みなどし、ごと〳〵と音して、人の出入する氣配の著きこそ憎ましけれ。睡眠を催しければ打ち臥したるに、蚊飛び來りて細聲に鳴きつゝ、顏の邊を飛び廻るに、小き身の相應に羽風あるこそ、最と憎くけれ。車の輪の軋みて、不快なる音のするを、平然



きしめく車にのりてありくもの、みゝもきかぬにやあらんといとにくし。我のりたるは、そのくるまのぬしさへにくし。」物かたりなどするに、さし出て我ひとりさいまぐるもの、すべてさし出は、わらはもおとなも、いとにくし。むかし物かたりなどするに、我しりたりけるは、ふと出ていひくだしなどするいとにくし。」れずみのはしりありくいとにくし。」あからさまにきたる子どもわらはべを、らうたがりて、をかしきものなどさらするに、ならひてつれとして知らぬ顏に乘り廻す者は、聾にてもあるらんと思はれて、憎まし氣なるものなり。殊に人の車を借りて我の乘りたるに、其の車の軋み鳴れば、車の持主さへ憎く思はる。集まりて物語する時、一人差し出がましく、我こそ物知りなれと言はん計りに、賢しらに喋り散らすは憎し。兒供にても成人にても、すべて差し出でたるは惡し。昔噺などする折にも、已の知りたる噺は、横合より口を叩きて、そは聞き古びたりなど言ふ、最と憎し。鼠の天井などを走り廻る、是も憎し。荷且に來る童男童女を勞はり愛みて、面白き

にきてぬいりて、でうどや、うちちらしぬるにくし。」家にても、みやづかひ所にても、あはでありなんとおもふ人のきたるに、そられをしたるを、わがもとにあるものどもの、おこしよりきては、いぎたなしと思ひがほに、ひきゆるがしたるいとにくし。」いままゐりのさしこえてものしりがほに、をしへやうなることいひ、うしろみたるいとにくし。」わがしる人にてあるほど、はやう見し女の事、ほめいひ出しなどするも、過てほどへにけれど、なほにくし。

翫具などを與ふれば、之に狎れて常に入り來り、遠慮もなく調度手道具などを、搔き廻し散らすなど、愛む心の失せて、却りて憎氣なるものなり。

己が家里にても、宮仕する禁中にても、面會を厭へる人の訪ひ來れば、嘘寢して追ひ返へさんと企めるに、己が使へる從者の起し寄り來て、斯くまでも貪り寢たまふものかなと言ひたげなる顏付して、引き動かす狀こそ憎ましけれ。

新參者の分際として、故參者を差し越え、物知り顏に敎へがましき事など言ひて、物の後



ましてさしあたりたらんこそ思ひやらるれ、されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。」はなひて誦文する人、大かに家の男しうならでは、たかくはなひたるもの、いとにくし。」のみもいとにくし。きぬのしたにをどりありきて、もたぐるやうにするも。」又犬のもろこゑに、ながくとなきあげたる、まがくしくにくし。

見するは憎し。

我が夫の昔し連れ添ひたる女を褒め出すは、時既に過ぎて古き事なれども、其の女の己が知れる人なるだけに、今尙ほ憎しと思ふものを、呪して現在言ひ語らふ女ならんには、其の妬ましさ如何ばかりかと察せらる。されど嫉妬は女の愼むべきことなれば、心の持ち方によりては、然まで妬ましくもあらずなるべし。

呪文を唱へ經を讀みて祈禱しつゝ、愼みもなく嘘する人は憎し。たとへ誦文の時に限らず、聲高く嘘するは、其の家の主人の外は、最と

めのとのをさこそあれ、女ばされごちかくもよらればよし。をのこゞをば、たゞわが物にして、立そひりやうしてうしろみ、いさゝかも此御事にたがふものをばざんし、人をばひさゝもおもひたらず、あやしけれ

憎きものなり。

蚤も亦た憎し。衣の下を潜りて跳り歩き、其の衣を持ち上ぐるやうにするは、心地惡し。

又た多數の犬の群れ居て、共に聲張り上げて、長吼に吼え鳴けるは、氣味惡く事々しげにて憎し。

乳母なれば女同志の事ゆゑ、禁中の女房達も近く寄るべけれど、乳母の夫なれば、寄り付きもせで難なき事なるが、すべて乳母の夫は、奇怪にも其の養ひ君をば、我物として振舞ひ、常に立ち添ひ後見して、已れ獨りの占領を擅にし、若し少許にても養ひ君の御意に背



ど、これがさが左心にまかせていふ人もなければ、所えいみじきおもゝちして、事をおこなひなどするよ。

文ことばなめき人こそ、いとゞにくけれ。世をなのめく者あれば、之を棒大に讒誣し、人を人とも思はざる面憎さは、誠に奇怪至極なれど、瀾らぬ神に祟なしと思ひて、何人も彼が咎を心のまゝに言ふものなきものから、ますゝ所得顔に增長して、自由氣儘に事を行ひなどするに至る。要するに乳母の夫は、憎まし氣なる厄介者なり。

【注意】「小一條院をば今内裏とぞいふ」より、「只今こそふかめとおほせられて、ふかせ給ふいみじうなかし」に至る迄の一段は、にくき物の部に入るべきものにあらざれば、下の卷の十卷の最後の條に移し加ふ。

消息の文にても、對話の言葉にても、人に對して無禮なるは憎し。殊に其の文の中に、世

にかきなしたる詞のにくさこそ、さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわろき事ぞ、されどわがえたらんはことわり、人のもとなるさへにくゝこそあれ、大かたさしむかひてもなめきは、などかくいふらんと、かたはらいたし。ましてよき人などを、さ申ものは、さるはをこにていとにくし。をこしうなどわろくいふ、いとわろし。我つかふものなど、おはする、の給ふなどいひたる、いとにくし。こゝもとに、侍る、といふもじをあらせ間を斜にして、人を輕蔑したる詞あるは、更に憎し。又た左程に尊敬の意を表はさでも善き人に、餘り鄭重慇懃に過ぎたる詞を用ふるも、亦た惡きことなり。されど世を蔑にした る文を、我方に得たらんは固より憎けれど、人の許へ他より送り來れるさへ、なか〳〵に憎きものなり。されば文のみなちず、對談にも禮を缺けるは、何故に斯くも無禮を言ふなるかと思はれて、傍目にも笑止の至なり。況して貴人に對して、無禮の言葉を用ふるは、痴愚の沙汰にて、最と憎し。又た奴僕從者なとが、其の主人を惡口するは憎く、主人が又



ばやと、きくこそおほかめれ。あいぎやうなくと。ことばしなめきなどいへば。いはるゝ人も、きく人もわらふ。かくおぼゆればにや、あまりてうろうするなど、いはるゝまである人も、わろきなるべし。

殿上人宰相などを。たゞなのる名を、いさゝかつた其の奴僕從者の言語動作を、在する、のたまふ、など言ふも憎し。斯る場合には、爰許に、侍る、などの文字も詞もあるものを、など用ひざるにやと思はるゝ事は、甚だ多し。たとひ愛嬌なき事にても、詞に品を作りて、優しく婀娜に言はるれば、言はれし人も怒ることなく、傍に聞く人も打ち笑むものなり。されど婀娜に過ぎて、餘りに人を馬鹿にして嘲弄るなよと言はるゝ迄に優しきは、却りて宜しからず。

殿上人參議以上などの上達部の本名を、少しも愼み心なくて、其の儘に呼ぶは宜しからぬ

ゝましげならずいふは、いとかたはなるを。げによくさいはず。女房のつぼねなる人をさへ、あのおもと、きみなどいへば、めづらかにうれしとおもひて、ほむることぞいみじき。殿上人きんだちを、御まへよりほかにては、つかさをいふ。又御前にて物をいふとも、きこしめさんには、などてかは、丸がなどいはん、さいはざらんにくし。かくいはんに、わろかるべき事かは。

ば、然は言はずして、其の稱號官名などを唱ふべく、宮仕する女房の局をさへ、其の本名を呼ばずして、彼の御許、何の君など言へば、愛敬ありて嬉しく思はるれば、人皆甚く稱揚すなり。すべて殿上人、若くは攝家清華などの公達を、主上の御前にてこそ其の名を呼べ、御前の外にては官名を言ふべく、又た其の公達自身にても、主上の聞し召す所にては、麁呂がなど言ふべきものにあらず。されば御前にては本名を呼び、其の他にては官名を唱ふるは禮なるに、若か言はずして慎み心もなく、常に殿上人などの本名を言ふ者あるは憎し。



ことなることをきこの、ひきいれごゑして、えんだちたる。「すみつかぬすゞり。」女房の物ゆかしうする。「たゞなるだに、いとしもおもはしからぬ人の、にくけごとしたる。

ひとり車にのりて物見る男、いかなる物にかあらん、やむごとなからずとも、わかき男どもの物ゆかしう思

其の本名を言はずして官名を唱へんに、などか差し悶ふる所あるべきや。

さして高尚優雅にもあらざる尋常平凡の男が、わざ〳〵聲吸き入れて、艶にみやびやかに物言ひたる。或は磨れども〳〵墨の磨り付き惡き硯。さては宮仕する女房の物に氣取れる。又は普通にても愛しと思はぬ人の、況して憎氣なる事などし、惡口雜言もしたるなど、更に憎しと思はる。

已れ一人車に乘りて、天下狹しと言はん計りに、唯我獨尊振りして物見る男は憎し。其の男如何なる身分の者かは知らねど、たとひ高

ひたるなど、ひきのせても見よかし。すきかげにたゞ一人かくよひて、心ひとつにまもりゐたらんよ。

【十八】こゝろときめきするもの

貴なるにしても、優美風雅なる青年の一人二人などは同乘せしめて、共に俱に物見るも宜しからずや。さるを車の御簾の影内に、唯だ一人榮耀がましく、巳が心のまゝに、車一杯に身を廣ごりたるは、憎しとも憎し。

【注意】右に掲げたる「ひとり車にのりて物見る男」の一節は、巾の卷の六卷五十九段にも見えて重複すれども、暫らく其のまゝに掲げ置きぬ又た之に續ける一節の、「あかつきにかへる人の、よべおきし扇懷紙もとむとて」より「あけていでぬる所たてぬ人いとにくし」迄を、わざと消除せり。

【十八】心ときめきするもの

雀の子を飼ひたるは、愛らしくて心動き、乳



すゞめのこがひ。」ちごあそばする所のまへわたりたる。」よきたき物たきて、ひとりふしたる。」からのかゞみのすこしくらき見たる。」よき男の車とゞめて物いひ、あないさせたる。」かしらあらひけさうじて。かうにしみたるきぬきたる。ことに見る人なき所にても、心のうちはなほたかし。」まつ人などある夜。雨のあし風のふきゆるがすも、ふとぞおどろかるゝ。」

兒を遊ばせて樂める前を通り行けば、我身も其處に寄り添ひたく思ひ、善き香を薫きて、一人靜に寢ぬれば、斯る時こそ物語らん友あれかしと心動き、朝早く又は夕つ方の薄暗き頃、唐のいみじき明鏡に向へば、巳が姿の一際勝ぐれて見ゆるに胸躍らせ、身分高く眉目秀麗なる男の、車を止めて從者と語らひ、今しも案内せさせて巳が方に訪ひ來る氣色に、何となく心動きて胸騒ぎせらる。或は頭の髪を洗ひて化粧を了り、香薫き染めたる衣を着たる時、見る人あれば、心勇むは言ふ迄もなく、たとひ見る人なくとも、心の内には尙ほ

【十九】すぎにしかた　こひしきもの

かれたるあふひ。」ひひなあそびのてうど。」ふたあゐえびぞめなどのさいでの、おしへされて。さうしのなかにありけるを見つけたる。」又をりからあはれなりし人の文。雨などのふりてつれ〴〵なる日さがし出たる。」こぞのかはぼり。」月のあかき夜。

【二十】こゝろゆくもの

よくかいたるをんなゑの、詞をかしうつゞけておほかる。」物見のかへさに、のりこぼれて、をのこどもいとおほく、うしよくやるもの、車はしらせたる。」しろ



愉快を覺ゆ。或は人待つ夜、兩脚の音、風の木の葉を吹き動かす聲すれば、さては其の人ならんと思はれて、圖らずも胸騷ぎするものなり。

【十九】過ぎにし方戀しきもの

枯れたる葵を見れば、過ぎにし賀茂の葵祭の美々しく盛なりしを慕はれ、幼少の頃の雛遊の調度玩具などを見れば、頑是なき昔の戀しく、赤藍青藍の二藍の絹、若くは淺紫の葡萄染の絹の裂帛が、歌の冊子などの間に押し壓されたるを見出したる時、再び若返へりて、それらの色の衣着まほしうて昔懷かしく、或は過ぎし當時の床しかりし人の文を、雨など降りて徒然なる日、文箱を檢べて探し出でたる、又は去年の夏の扇を見付け出したるなど、皆其の當時を戀ふるの料なり。若し夫れ月明らかにして千里隈なきの夜、獨坐默想して月を眺むれば、徐ろに往事を追懷して、感慨轉禁ずべからざるものあるなり。

【二十】こゝろゆくもの

見事に書かれたる女の繪卷物に、面白く可笑しき詞の、多く書き連ねたるは、見るにも讀むにも心ゆくものなり。物見の歸り路に、同じ車に乘り溢れん程に、女同志の多く乘りて、

くきよげなるみちのくがみに。いとほそうかくべくはあらぬ筆して、文かきたる。」川舟のくだりさま。」はぐろめのよくつきたる。てうばみに、てうおほくうちたる。」うるはしきいとの、れりあはせぐりしたる。」ものよくいふおんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる。」よるれおきてのむ水。

車に副へる男ども、最と多く、巧に牛を追へる御者の、其車を馳せ進めたる、是も意に適ひて好し。又た白く清らかなる檀紙に、細字を書くべき筆ならぬ頃合の筆にて、文の善く書かれたる。川舟に乘りて流を下る。鐵漿の齒に善くつきたる。雙六の遊戯に、賽の目の丁の數の多く打ち當てたる。五色などの奇麗なる糸を差り合せたる。言語明晰流暢なる陰陽師を賴みて、河原に出て、病氣災難除の呪咀の祓したる。夜中目醒めて、喉の渴きたるに水呑みたる。いづれも皆心ゆきて氣味善きものなり。



つれ〴〵なるをりに、いとあまりむつましくはあらず、うとくもあらぬまらうとのきて、世の中の物がたり、此ごろある事の、をかしきも、にくきも、あやしきも、これにかゝり、かれにかゝり、おほやけわたくし、おぼつかなからず、きゝまきほどにかたりたる、いと心ゆくこゝちす。

社寺などにまうでゝ、物まうさするに、寺には法師、やしろにてれぎなどやうのものゝ、思ふほどよりもすぎて、とゞこほりなく聞よ

徒然無聊に苦める時、餘り懇意にも過ぎず、さりとて隔意あるにもあらぬ客人と對坐して、世間話などし、時事問題などを談じ、近頃の出來事にて面白きもの、憎々しきもの、怪しげなるものなど、彼につけ、此につけ、公私共に明確にして、聞き飽かざる程度に語りなどしたるは、最も愉快にして、心ゆく思のするものなり。

神社寺院などに參詣して、我が祈願を神佛に申さするに、寺には法師あり、社には禰宜ありて、我が思ふよりも懇ろに、遺憾なく代願し呉れたる言葉の、最と聞好く會得し易かり

く申たる。

びらうげは、のどやかにやりたる。急きたるは、かろ〳〵しく見ゆ。あじろは、はしらせたる。人の門よりわたりたるを、ふと見るほどもなく過て、さもの人ばかりはしるを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆる〳〵とひさしくゆけば、いとわろし。

うしは、ひたひいとちひさく、しろみたるが、はらのした、あしのしも、尾のすそしろき。馬は、むらさきしは、心ゆくものなり。

束帶などの時の乘用なる檳榔毛の車は、靜に緩々と進むるを可とす。急ぎ馳するは、威儀を失ひて輕々しく見ゆ。されど褻の時とて平常に召す網代車は、急ぎ走らせて、今門前を通るよと見る間に、早や行き過ぎて、唯だ從者のみ後より駈け走るに、誰の車ならんと思ふ程こそ可けれ。緩々遲々として行くは、見苦しくて惡し。

牛は、前額小さくて白色がかり、體軀は黑毛なれど、下腹、脚の下部、尾の先など、白きが可し。馬は紫色とて、赤身黑毛なるが、尙



のまだらづきたる。あしげ。いみじくくろきが、あしかたのわたりなどに、しろきところうすこうばいのけにて、かみをなごもいとしろき、げにゆぶかみともいひつべき。

うしかひはおほきにて。かみあかしらがにて、かほのあかみて、かご〳〵しげなる。」ざふしき、ずゐじんは、ほそやかなる。よきをのこもなほわかきほどは、さるかたなるぞよき。いたくこえたるは、れぶたからん人とおもはる。」ことれりは、ちひさくて、かみのうるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりほ所々に斑紋あるが可し。蘆毛の白駒も亦た可し。或は甚じき黑駒の、脚と肩の邊に白き所ありて、其の所は薄紅梅色の毛にて、尾と鬣とは純白なるが、白木綿髮とも言ひつべき程のもの、最と可し。

牛飼の舍人は、巨軀長身の赤白髮にて、赤ら顏の心利きたる狀なるが可く、雜色隨身などの召使者は、細やかなる體軀したるが可し。

貴人紳士の年若きは、矢張り細やかなるが見好く、肥滿したる人は、眠たからんやうに見えて惡し。小舍人とて、少將中將などの召使の童は、體軀小さくて、髮の毛の飽くまで黑

て物などいひたるぞ、りやうくしき。

猫は、うへのかざりくろくて、ことはみなしろからん。

説經師はかほよき、ほとまもらへたるこそ、其さく事のたふとさもおぼゆれ。外目しつれば、ふとわするゝに、にくげなるは、つみやうらんとおぼゆ。このことばはとゝむべし。すこしとしなどのよろしきほどこそ、かやうの罪ばえがたのことば、かき出けめ、いまはつみいとおそろし。又たふとき事、だうしんおほかく、毛先の捌善くて、其の風の爽颯に、聲明亮にして詞奇麗に、威儀を正して愼深く物言ひたるは、傍の見る目も凛々しくて善し。

説經法談する法師の温容美貌なるは、聽者が其の顔を見守るものから、説經も善く耳に入りて、法の道の尊さも知らるれど、醜く憎氣なる顔したるは、傍見などして説經も耳に入らず、聞きたるも圖らず忘れなどするものから、醜き法師こそ、罪作りなれと思はる。されど斯る惡口は、是にて中止とせん。年若き間こそ、人の美醜を評して、斯かる罪恐ろしき言葉を筆にもしつれ、今日に至りては、心



りて、せつきやうすといふ所に、さいそにいきぬる人こそ、猶此つみの心ちには、さしもあらで見ゆれ。

藏人おりたる人、むかしは御せんなどいふ事もせず、そのとしばかり。うちわたりには、ましてかげも見えざりける。いまはさしもあらざめる。藏人の五位とて、それをしもぞ、いそがしうつかへど、なほなごりつれに思ふさへ恥づべき事どもなり。されど説經師の尊く有り難きに付けて、定めて道心も多からんとて、其の説經する道場へ、人に先立ちて我一番に駈け付けんは、彼の罪恐ろしき心より考ふれば、然なくとも宜かるべしと思はるゝなり。

藏人は殿上人なれど、一旦藏人を罷むれば、六位以上にても地下人になるなり。昔は地下人は、供奉の時、馬にて前驅などすることなく、唯だ藏人にてありし間のみ、前驅を勤めたるにて、地下人たる後は、禁中には其の影も形も見えざりしに、當今に於ては、夫をし

〳〵にて、心ひとつは、いとまある心ちぞすべかめればさやうのところにいそぎゆくを、一たびふたゝび聞そめつれば、つれにまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにも、かたひらいとあざやかに、うすふたあゐ、あをにぶのさしぬきなど、ふみちらしてゐためり。えぼしに物いみつけたるは、けふさるべき日なれど、くどくのかたには、さはらずと見えむとにや、いそぎ來て、その事するひじりと物語りして、車たつるさへぞ見いれ、ことにつきも召し使ひて、供奉の先驅なども爲させつ、藏人たりし五位とて、なか〳〵に忙しう使ひ給へど、尙ほ餘暇ありて徒然なれば、心自から綽々として、人に先立ちて說經所などに急ぎ行くなるが、其の說經を一度聞き二度聞くにつけて、遂には絕えず聞かま欲しうなりて、炎夏三伏の時節をも厭はず、立派なる帷子、薄二藍の直衣、縹色に靑味を帶びたる靑鈍の狩袴などを着け、中には烏帽子に物忌を書きたる札を差したるもあるは、今日は謹愼潔齋の日とて、他出など爲まじけれど、佛事功德說經信心などには、差支なき容子を見せんと



たるけしきなる。久しくあはざりける人などのまうであひたる、めづらしがりて、ちかくゐより物かたりし、うなづきをかしき事など、かたり出て、扇ひろうひろげて、口にあてゝ笑ひ、さうぞくしたるずゝかいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、何がしにて其人のせし八かう、經くやうなど、いひくらべゐたるほどに、此說經の事もききいれず。なにかは、つれにきくことなれば、みゝなれて、めづにや、急ぎ說經所に參りて、今日の法談する法師と物語りなどし、門外より入り來る車の何人なるかなど、事々に目を付くる態にて、久しく面會せざりし人と、圖らずも此處に邂逅ひたるを珍らしとし、其の側に寄りて物語りし、面白く可笑しく頭を頷づき搖かして語り合ひ、扇を開きて口に當てゝ笑ひ、金銀珠玉の飾したる珠數を、爪繰りては、手慰みに弄びなどしながら、彼方此方を見廻して、車の良否を批評し、某の所にて某の法師の行へる八講、經供養などの尊さを比較する程に、今此の說經を耳にも、かけざるは、一度ならず

らしうおぼえぬにこそはあらめ。

さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とゞめておるゝ人、せみのはよりもかろげなるなほしさしぬき、すゝしのひとへなどきたるも、かりぎぬ姿にても、さやうにては、わかくほうやかなる三四人ばかり。さふらひのもの、又さばかりしていれば、もこぬたりつる人も、すこしうち身じろき、くつろぎて、かうざのもとちかきはしらのもとなどにすゑ

二度ならず聞き馴れたれば、耳珍らしくもあらぬ故なるべし。

然るに講師着席の後暫時して、少數の先驅者の警蹕の聲に車を馳せ來り、今しも車を下りて、說經所に入り來るを見れば、蟬の羽衣よりも尙ほ輕げなる直衣狩袴、薄き生絹の單衣着たるもあり、狩衣姿もあれど、皆々年若くつや〳〵しげなる者三四人にて、從者も亦た三四人なるが、說經の座に入り來りぬれば、既に座を占めたる人々、少しづゝ身を動かし、席を除けて、講座近き柱の傍などに、彼の人々を据ゑたれば、說經の聽聞を主眼として來



たれば、さすがにずゞおしもみなどして、ふしをがみゐたるを、かうじもはえ〳〵しうおもふなるべし。いかでかたりつたふばかりと、さき出たる。ちやうもんすなと、たちさわぎ、ぬかづくほどにもなくて、よきほどにて立いづとて、くるまどものかたなど見おこせて、われどちいふ事も、何事ならんと覺ゆ。見しりたる人をば、をかしとおもひ、見しらぬは誰ならん、それにや、かれにやと、めをつけて、おもひやらるゝこそをかしけれ。

れるにはあらで、物の序に立ち寄りたる狀ながら、流石に道場の禮儀とて、珠數押し摩りなどして、伏し拜みゐたるを、說經師も定めて光榮ありと滿足に思ひたるべし、世にも言ひ傳へられん程に心を籠めて、熱心に說き出たるが、先つ程、此等歷々の人が聽聞するとて、皆々席を讓り騷ぎ、此等の人も亦た禮拜したる狀にも似ず、中途より退出せんとて、乘り來れる車の方を見遣りなどし、互に何事かを語り合ひ、滿座の中に見知りたる人あるを愉快げに思ひ眺め、見知らぬをば、誰ならん彼ならんと目を配りて、思ひ運らせる狀こ

そこに説經しつ、こゝに八かうしけりなど、人いひつたふるに、其人は有つや、いかゞはなど、さだまりていはれたる、あまりなり。などかは、むげにさしのぞかではあらん。あやしき女だに、いみしく聞めるものをば。さればさて、はじめつかたは、かちありきする人ばなかりき。たまさかには、つぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物まうてをぞせし。説經など

そ面白けれ。

斯くも藏人の五位などが、人に先立ちて説經所に行けども、其の説經を耳にも懸けず、又た歴々の人達が、聽聞すと言ふよりも、人を見に來るが如き狀は、何れも感服出來がたけれど、さりとて、其處に説經あり、此處に八講ありと言ひ觸されたるに、彼の人は聽聞したることありや、否終に聽聞したることなしと言ひ定められたるも、亦た餘りの事なり。功德ある道場に、何故左まで無下に顔出しもせざるは、如何なる心にやあらん下賤なる女にても、殊勝にも聽聞するものを、況して貴



は、ことにおほくもきかざりき。此ごろ其をりさし出たる人の、いのちながくて見ましかば、いかばかりそしりひはうせまし。

ぼだいといふ寺に、けちえ

婦人の參詣せざるは何事ぞや。尤も昔は貴婦人達の徒歩する者なく、皆車に乘りて出でたるなれど、稀には窄裝束とて、市女笠を冠り、薄絹着て、婀娜めかしき化粧して徒歩する者も、寺社などには參詣したるが、説經は多く聞く者なかりしを、當今は大方徒歩にて、説經を聞きに行く貴婦人の多ければ、昔の人の長壽にて今の狀を見る者ありとせば、如何に誹謗するならんと思はるるなり。但し世態の變遷止むを得ざるなれば、無下に説經所に行かざるも、亦た宜しからず。

上東門院の御祈願所にて、洛東神樂岡の東な

ん八かうせしが、きたりまうでたるに、人のもとよりとくかへり給へ、いとさうくしたさいひたれば、はちすのはなびらに、

「もとめてもかゝるはちすの露をおきてうき世に又はかへる物かは」とかきてやりつ。まことにいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞおぼゆる。さうちうが家の人の、もどかしさも忘ぬべし。

る菩提樹院に、結縁八講の催しありければ、己れ行きて詣でたるに、人の許より、最と寂しければ疾く歸り來よとの使なれば、蓮の花瓣に、

もとめてもかゝるはちすの露をおきて
うき世に又はかへるものかは

と詠みて、書き遣りたり。實にわざ〳〵求め探して迄も、斯る蓮花の露深き菩提の地にこそあらまほしけれ、などか憂き濁り世に、歸らん心の起るべきやとて、蓮す花瓣と其の露とに菩提樹院を懸けて、佛法談義の尊く有り難きを詠みたるなるが、洵に歸るべくもあら



こしらかはといふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達部、けちえんの八かうし給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人のあつまりゆきてきく、おそからん車は、よるべきやうもなしといへば、露とともにいそぎおきて、げにぞひまなかりける。なかえのうへに、又さしかされて、みつばかりまでは、

で、何時までも此の寺に止まりたき心地せられたり。されば菩提に入りし常任が家の人の、焦躁しがりし心ばへなども、更に氣付かず。

小白河殿は、前の右大臣小一條大將藤原師尹公の邸なるが、三位以上の上達部集まりて、此處にて結縁の八講ありければ、誠に結構なる事なりとて、人多く參り聞くに、遲れたる車は近寄るべくもあらずと言ふにぞ、曉の露と共に、早天より起き出でゝ參りたるに、早や隙間なく車立ち並びて、轅の上に轅を重ぬる有樣なれば、第一列第二列第三列の車までは、辛くも講談を聞くを得べきが、頃は六月

すこし物もきこゆべし。六月十餘日にて、あつき事世にしらぬほどなり。いけのはちすを見やるのみぞ、すこしすゞしき心ちする。左右のおとゝたちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。ふたあゐのなほしさしぬき、あさぎのかたびらをぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、あをにびのさしぬき、しろきはかまも、すゞしげなり。やすちかの宰相なども、わかやぎたちて、すべてたふときことのかぎりにもあらず、をかしき物見なり。ひさしを始め、若き公達、狩衣直衣の姿面白く、皆々已が席をも定めずして、彼方此方立ち彷徨ひて、遊び居るなど可笑しく、兵衛佐藤原實方、侍從仲顯などは、小一條大將の家の子にて、今日の八講の接待役を勤め給ひ、其の外尙ほ弱年の公達も在しまして、出入し給ふさま最と面白し。既にして日高く時移りぬる頃、中宮の御父君にて、三位中將と聞えたる今の關白道隆卿は、薄紅に黃色交りの羅に、二藍の直衣、同じ色の狩袴、濃き蘇芳の下袴に、張を入れたる白き單衣の鮮麗なるを着て、今しも八講の席に歩み入り給ふ。外の上達部十日過の暑さ比類なく、唯だ邸内の池の蓮を見て、聊か涼しき心地するのみなり。左大臣源雅公卿、右大臣藤原兼家卿の二人は見えざれど、其他の上達部は皆悉く揃はれて、二藍の直衣狩袴、淺黃の帷子などの透き通りたるを着給ひ、若からぬ上達部は、青鈍又は白の袴にて、涼しげなる扮裝なり。宰相安親卿は、今年寛和二年に五十七歳なれど、年若なる身扮し給ふなど、雪に八講の尊きのみならず、實に面白き物見なり。庇の御簾は高く卷き上げ、長押の上には、上達部なが〳〵と居並びて奥に向き給ひ、其の次の間には、殿上



のみすたかく卷あげて、なげしのうへに上達部おくにむかひてなが〳〵とゐ給へり。其下には殿上人、わかききんだち、かりさうぞく、なほしなども、いとをかしくてゐもさだまらず。こゝかしこにたちさまよひ、あそびたるもいとをかし。されかたの兵衛の佐、なかあきらの侍從など家のこにて、いますこしいでいりたり。まだわらはなるきんだちなど、いとをかしうておはす。」すこし日たけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞきこえし、かうの

うすもの、ふたあゐのなほし、おなじさしぬき、こきすはうの御はかまに、はりたるしろきひとへの、いとあさやかなるをき給ひて、あゆみ入給へる。さばかりかろびすゞしげなる中に、あつかはしけなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。」ほそぬりぼれなど、ほれはかれど、たゞあかきかみを、おなじなみにうちつかひもち給へるは、なでしこのいみじうさきたるにぞ、いとよくにたる。まだ講師ものぼらぬほどに、かけばんどもして、何には、淺黄の帷子に、白の袴にて涼しげなる中に、道隆卿は暑かはしき御扮裝なれど、最と芽出たく威儀堂々として見え給ふ。さて皆々持ち給へる扇には、細塗骨もあり、平骨もありて、骨は種々なれど、地紙は何れも赤色なるを打ち開きて、波を打たせて使ひ給へる狀は、瞿麥の花の咲き亂れたるにも似て、誠に麗しきものなり。斯くて講師も未だ壇上に見えざる間なれば、懸盤とて今日の謂ゆる膳やうの物を運ぶは、關白殿に何物かを進るなるべし。又た權中納言藤原義懷卿の、今日の御有樣こそ、常よりも勝りて清げなるは、限り



かはあらん物まゐるべし。よしちかの中納言の御ありさま、つれよりもまさりて、きよげにおはするさまぞ、かぎりなきや。上達部の御名など、かくべきにもあらぬを、たれなりけんと、すこしほどふれば、いろあひはなゝといみじく、匂ひあさやかに、いづれともなき中のかたびらを、是はまことにたゞなほしひとつをきたるやうにて、つれに車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ、をかしと見ぬ人なかりけんを。」後にきたる車の、ひまもなく尊く見ゆれ。さても上達部の御名を、義懷の中納言などと、顯はに書くべき筈のものならねど、始めの程こそ誰なりと知られ、後には其の人も見分けがたく、何れも直衣袴などの色合花々しく、あざやかなる匂して、皆々似たる帷子など着給へる中に、義懷卿ばかりは、唯だ直衣のみを着たるやうにて、常に女人の車の方を見遣りつゝ、時には使の者をして、車中の女人に物言ひ寄來せ給ふ狀を、面白しと見ぬ人なかりければ、斯くは其の名を顯はに書きたるなり。さて遲れて來る女車の、近寄るべき隙間もなくて、池の傍に立て

かりければ、池にひきよせてたてたるを見給ひて、されかたのきみに、人のせうそこつきぐしくいひつべからんもの、ひとりとめせば、いかなる人にかあらん、えりてゐておはしたるに、いかゞいひやるべきと、ちかくゐ給へるばかり、いひあはせて、やり給はん事はきこえず。いみしくまそびして、車のもとにあゆみよるを、かつはわらひ給ふ。あとのかたによりていふめり。久しくたてれば、哥などよむにやあらん、兵衛佐返しおもひまうけよなどわたるを、義懷卿見給ひて、接待役なる實方の君に、人の言ひ遣る消息を、誤りなく立派に傳ふべき者あらば、一人雇はせ給へと賴みければ、實方の君、やがて何者かを撰び來たまへるに、義懷卿、彼の池の傍なる女車に言ひ遣るべき言葉を、近く左右に居給へる人々と談合せられたるが、如何なる事を言ひ遣り給ふにや、已が車には聞えざりしも、其の消息を傳へん使の者は、立派なる用意裝束して、彼の車に歩み近寄るを、此方よ、義懷卿等の笑ひ給ふに、使の男、やがて車の後の方に寄りて、何事かを言ひ傳ふる狀なり。されど待



らひて、いつしかかへりごときかんと、おとな上達部まで、みなそぶたざまに見やり給へり。げにけそうの人々まで、見やりしもをかしう有しを。かへり事きゝたるにや、すこしあゆみくるほどに、あふぎをさし出てよびかへせば、哥などのもじを、いひあやまちてばかりこそよびかへさめ、久しかりつるほどに、あるべき事かは、なほすべきにもあらじ物をとぞおぼしたる。」ちかくまゐりつくも心もとなく、いかにくと、たれもとひ給へどもいはず。つこと久しければ、斯は歌など詠むなるべし、實方の君、其の返歌の用意などし給へよと、義懷卿の笑はせ給へば、さては如何なる返事の來るならんかと、温厚なる上達部は更なり、高貴顯證の人々、皆々彼の女車の方を見遣り給ふも可笑し。斯くて返事を聞きたるにや、使の男少し此方へ歩み歸れるに、車中より扇を差し出して呼び返せば、又た後へ返り行くに、さては歌の文字の誤を直さんためなるべけれど、斯くも久しく待せたるなれば、たとひ不滿足なる歌なりとて、直すべきものにあらずと思はる。さる程に使の男歸り來れば、

權中納言見給へば、そこにまりてけしきばみ申す。三位中將、さくいへ、あまり有心過てしそこなふな、との給ふに、これもたゞおなじことになん侍るといふはきこゆ。藤大納言は人よりもけにのぞきて、いかゞいひつるとの給ふめれば、三位中將、いとなほき木をなんおしをりためるときこえ給ふに、うちわらひ給へば、みな何となくさとわらふ、こゑきこえやすらん。中納言、さてよびかへされつるさきには、いかゞいひつる、これやなほしたること、近く參るまでも待ち遠くて、如何なる返事ぞと、異口同音に問ひ懸くれど、其の男何とも答へず、義懷卿を見て其所に寄り添ひ、其の返事を言はんとする模樣なれど、容易く言ひ出し得ざれば、三位中將道隆卿、此の男に向ひて、疾く言へ、餘りに心あり顏に容態振りて、興を醒すなと仰せられけるに、使の男、申し上ぐるも興醒むる業なれば、申し上げず て興醒まし給はんも同じ事なりと、言ふ其の詞の已が車にも聞ゆるに、大納言藤原爲光卿は、人よりも先立ちて、如何返事言ひつるよと差し覗き給へば、道隆卿、彼の女車よりの



さゝとひ給へば、ひさしうたちて侍りつれども、ともかくも侍ざりつれば、さはまゐりなんとてかへり侍るを、よびてとゞめ申す。たれが車ならん、見しりたりやなどの給ふほどに。講師のぼりぬれば、みなゐしづまりて、そなたをのみ見る程に、此車は、かひけつやうにうせぬ。したすだれなど、たゞけふはじめたりと見えて、こきひとへがされに、ふたあゐのおりもの、すはうのうすものゝうはぎなどにて、しりにすりたるも、やがてひろげなから、うち歌に、「なほき木にまがれる枝もあるものを」と詠みたる詞を用ひ給ひて、素直に言ふべきを曲げて節つけたれば嘲る心にて、最と直き木を押し折りたるやうなりと答へ給ふに、爲光卿打ち笑ひ給へば、皆々何とはなくて颯と笑へるにぞ、其の聲の彼の女車にも聞えたらん。さて義懷卿、重ねて使の男に問ひ給ふには、然らば呼び戻さるゝ前には、如何なる詞なりしぞ、今の此の詞は、直しての後の事なりやと仰せらるゝに、然には候はず、餘り久しく待ち侍べれど、何とも返事なきまゝに、さらばとて歸り侍るを、扇を差し招きて、呼

かけなどしたるは、なに人ならん、なにかは。人のかたほならんことよりは、げにと聞えて、中〳〵いとよしとぞおぼゆる。」あさゞのかうじせんはん、かうざのうへもひかりみちたる心ちして、いみしくぞあるや。あつさのわびしきにそへて。しさすまじき事の、けふすぐすまじきをうちおきて、たゞすこしきゝてかへりなんとしつるを、しきなみにつゞぬたる車の、おくになんゐたれば、いづべきかたもなし。あしたのかう果なば、いかで出なんとて、

び戻しての此の返事に候と申せり。誰の車ならん、見知りたる者なきやと、義懷卿の仰せらるゝ間に、講師高座に上りたれば、一同靜粛にして、唯だ講師の方を見遣る程に、彼の女車は搔き消すやうに、何時しか失せ去りて影もなし。其の失せ去らざる前つ方に、車の下簾などは、今日始めて用ひたりと見えて新らしく、濃き紅の單衣襲の夏裝束に、二藍の織物、蘇芳色の羅を上に着て、引きたる裳の裾を廣げながら、車の後に打ち掛けなどしたるは、如何なる人ならん、餘りに不作法なれば、然るべき人にてもあらざるべし。又た其の返



まへなる車どもにせうそこすれば、ちかくたゝんうれしさにや、はや〳〵とひきいで、あけて出すを見たまふ。いとかしかましきまで、人ごといふに、おいかんだちめさへ、わらひにくむを、きゝもいれず、いらへもせで、せばがり出れば、櫃中納言、やゝまかりぬるもよしとて、うちわらひ給へるぞめでたき。それもみゝにもとまらず、あつきにまどひ出て、人して、五千人の中にはいらせ給はぬやうもあらじと、きこえかけてかへり出にき。」そのはじめよ

事にても、片帆の頑固にて、曲り節などあらんよりは、唯だ素直に實に然なりとのみ聞えたらんこそ、なか〳〵に宜しかるべきものをと思はるゝなり。此の日の朝座の講師清範は、播磨の人にて、法相宗の律師なるが、文珠の化身とまで稱へられて、說法無双の聞えあれば、講座の上にも法の光の滿ち渡れる心地して、洵に尊く有り難くこそ覺ゆれ。但し已に暑さの佗しき砌にてもあり、且は半途にて捨て置き難き用事の、今日は是非とも濟ましゞるべからざるをも打ち置きて、聽聞に參りたるなれば、暫時にして歸りなんとすれど、敷

り、やがてはつる日まで、たてる車のありけるが、人よりくとも見えず、すべてたゞあさましう、ゐなどのやうにてすごしければ、ありがたく、めでたく、こゝろにくゝ、いかなる人ならん、いかでしらんとひけるを聞給ひて、藤大納言、なにかめでたからん、いとにくし、ゆゝしき物にこそあなれ、その給ひけるこそをかしけれ。」さてその二十日あまりに、中納言のほうしになり給ひにしこそ、あはれなりしか。さくらなどのちりぬるも、なほよのつれ

並びて集へる車の最も奥に居たれば、出でんとすれど出づべき所もなし。是非なく朝座の講義濟み果つるまで待ちて、我が通り出ん道に塞がれる車に、此の由を案内すれば、皆々進み寄らんことを悦びて、急ぎ車を引き出だし、道を開きて已が車を外に出さしむるを、上達部など見給ひて、いと騒々しく口々に何事かを言ひ給ひ、年老いたる上達部さへ、己が歸るを笑ひ憎めど、更に耳にも懸けず、挨拶もせで、狹き通路を引き出るに、權中納言義懷卿、漸く退出るも宜しかるべしとて、笑ひ給へるは、釋迦の說法中、五千人の聽者、



なりや。老をまつまのさだに、いふべくもあらぬ御ありさまにこそ、見えひ給しか。」

法座を起ちて退出するに、釋迦默然として制止し給はず、其の左右に向ひて、退出するも亦た可なりと仰せられたること、法華經に見えたるを思ひ寄せ給へるにて、最と芽出度けれど、それさへ耳にも止まらず、暑さに堪へ兼ねて、辛くも外に出づるを得たれば、乃ち使を義懷卿に遣りて、此の暑氣にては、御身も亦た五千人中の一人となりて、退出し給ふならんと告げ參らせて、歸路に就きたり。然るに此の八講の初日より最終の日まで、絶えず聽聞に參れる女車ありて、何人も其の車に言ひ寄る者さへなく、群衆の中に孤立して、

繪のやうに動かぬ狀なりければ、世にも珍らしき奇特の人かな、有り難く芽出たく、健氣にも亦た殊勝なれば、如何なる貴婦人ならん、何とかして知りたきものなりと己れ言へば、大納言爲光卿聞き給ひて、始終聽聞したりとて、何ごか芽出たかるべき、將た又た然るべき貴婦人にもあらざるべしと、仰せられたるこそ面白かりけれ。さて此月廿日過ぎになりて、花山院の出家せさせ給ひし御供に、義懷卿も法師に成り給へるは、憐にも又た惜むべき事なりかし。櫻などの花の散るは、尋常一樣にて、惜むにも足らねど、義懷卿は未だ三十歲ばかりにて、老を待つ間の遠ければ、狂風落花の歎よりも、更に惜まれて見え給ひしよ。

〔注意〕「七月ばかり、いみじくあつければ、よろづの所あけながら、夜もあかすに」より「我きつる所も、かくやとおもひやらるゝも、をかしかりぬべし」までの一節を消除す。

## 卷の三　廿一より三十八に至る十八段より成る

【廿一】木の花は

梅の花は、濃き薄きを問はず紅梅なるが好し。櫻は花瓣大く、赤味を帶べる葉の色濃くて、細き枝に多く咲きたるが面白く、藤の花は、其の房の垂るゝこと長くして、紫の色濃く咲



【廿一】木の花は

梅は、こくもうすくもこうばい。櫻の花びらおほきに、葉いろこきが、枝ほそくてさきたる。藤の花、しなひながく、色よくさきたる、

いとめでたし。うの花は、しなおとりてなにとなけれど、さく比のをかしう、郭公の陰にかくるらんと思ふにいとをかし。まつりのかへさに、むらさきのゝわたりちかきあやしの家ども、おどろなるかきねなどに、いとしろう咲たるこそをかしけれ。あをいろのうへに、しろきひとへがさねかづきたる、青くちばなどにかよひていとをかし。

きたるが賞でたし。空木の卯の花は、梅、櫻、藤などより品劣りて、是れぞと取り立てゝ言ふべき程のものならねど、其の卯の花の咲く時節は、殊に面白き折にて、新古今集にも「なく聲を、えやは忍ばぬ郭公、初卯の花の、かげにかくれて」とあるが如く、卯の花蔭に郭公の隱れやせんと思へば、最と可笑し。恰も賀茂の祭の頃なれば、祭見の歸るさに、紫野の邊近き賤が家の、雜草荊棘の茂れる垣根などに、卯の花の白う咲きたるを見れば、表白く裏青き、青朽葉色の卯の花衣を、聯想するも面白し。



四月のつもごり、五月のついたちなどの比ほひ、橘のこくあをきに、花のいとしろく咲たるに、雨のふりたるつゞめてなどは、よになく心あるさまにをかし。花の中より、みのこがれのたまかと見えて、いみじくはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたるさくらにもおとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず。

なしの花、よにすさまじくあやしき物にして、めにちかくはかなき文つけなどだにせず。あいきようおくれたる人のかほなど見ては、四月の晦日、五月の朔日の頃、橘の葉色の濃く青きに、いと白き花の咲きたるが、雨降りたる曉天の風情など、世にも稀なる妙趣を帶び、其の白き花の中に、黃金の珠玉かと見ゆる實を抱ける狀の、際立ちて立派なは、春の曙に露に濡れたる櫻の花にも劣らず、況して郭公の宿るものと思へば、橘の花の床しさは、今更ら事新しく褒め立つべきにもあらず。

梨の花は賤しくして、梅櫻などのやうに、世に持て囃されざるものにて、又歌に詠みて、其の枝に文を懸くることなどする人もなし。愛嬌なき人の顏色を見ては、梨の花のやうな

たとひにいふも、げに其いろよりしてあいなく見ゆるを、もろこしにかぎりなき物にて、文にもつくるなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。やうきひ、みかどの御使ひにあひて、なきけるかほにせて、梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは、おぼろげならじとおもふに、猶いみじうめでたき事は、たぐひあらじとおぼえたり。

りと喩へ言ふも、實に其の色の白きのみにて、心の情なく見ゆるに依るなり。されど唐土にては、限りなく賞美せられ、梨花の詩に詠まれたるもの甚だ多ければ、無下に賤むべきにあらず、必ず賞美せらるる仔細あるべしと思はれて、心を用ひてよく〳〵見れば、唯だ眞白にはあらで、花瓣の尖端に、少し赤色を帶びたるが、有るか無きかに薄く彩色られたり。されば玄宗皇帝、寵妃楊貴妃の歿したるを歎き、道士を使として其の魂魄を求めしめらるるに、道士蓬萊に到り、貴妃に逢ひて帝の消息を傳ふるや、妃涙を流して歎きけるが、其



桐の花、むらさきにさきたるは、なほをかしきを、葉のひろごりさま、うたてあれども、又こと木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしに、ことゝくしき名つきたる鳥の、これにしもすむらん心ことなり。ま

の愁思の顏を梨花に喩へて、長恨歌に「玉容寂寞涙欄干、梨花一枝帶春雨」と白樂天の詠みたるは、小說的の朧氣なるものにはあらずと思はるれど、尙ほ此の外に、梨花に喩へたる面白き引例は、唐土には數限りもなきことなり。

桐の花の紫色に咲きたるは、梨の花よりも優れて見ゆれど、其の葉の大きく廣ごりたるは、快からず思はる。さりとて他の異なりたる木とは同日の論にあらず。唐土にては、太平の瑞鳥として、珍奇なる名を付けられたる鳳凰が、桐の木にあらざれば棲まず、と言へる心

してことにつくりて、さまくなるれの出くるなど、をかしさはよのつねにいふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。かればに、さまことにさきて、かならず五月五日にあふもをかし。

【廿二】 池は

かつまたの池。いはれのいの既に芽出たきを、況して桐の木にて作られたる琴の、種々の好き音を出すなど、面白しと言ふは通常一般の事に用ふる詞にて、是は又た甚く芽出たきものなり。

楝は一名旃檀樹とて、木振りは憎げなれど、花は薄紫の面白きものなり。枯れたらん如き美はしからぬ葉の挾間毎に咲きて、五月五日の端午の節句には、惡氣を避くとて其の葉を佩ぶるもあり、又は其の枝を軒に翳すもあるは可笑し。

【廿三】 池は

萬葉集に、「かつまたの池は我知る蓮なし、しかいふ君がひげなきがごと」と見えたる勝間田の池は、下總とも、美作とも、大和とも言へり。磐余の池は、大和にあり。贄野の池は、初瀬の觀音に詣ずる途すがら、鴨などの水鳥が群れ居て、立ち騷げるを面白しと見たる池なり。水無の池は、何ゆゑ斯る奇怪なる名を付けたりやと問ふに、五月などの雨多く降る時は、此の池に水など見たくとも無く、又た旱魃の年は、春の初に當りて、此の池に水多く出づと言へば、さらば水無とは、常に池涸れ乾けばこそ付けたる名なれ、春の初に水の出づる折もあるに、一概に水無と言はんけ。にえのゝ池。はつせにまゐりしに。水鳥の隙なくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしのいけ。あやしうなどてつけけるならんといひしかば五月など、すべて雨いたくふらんとする年は、此いけに水といふ物なくなんある。又日のいみしく照さしは、春のはしめに水なんおほく出るといひしなり。むげになくかわきてあらばこそさもつけめ。いづるをりもあるなるを、一すぢにつけけるかなと、いらへまほしかりし。さるさはの池、うれ

めの身をなげけるをきこしめて、行幸などありけんこそ、いみじうめでたけれ。れくたれがみをさ、人丸かよみけんほど、いふもおろかなり。御まへの池。又何の心につけけるならんとなかし。かゞみのいけ。さやまの池、みくりといふ哥のをかしくおぼゆるにやあらん。こひぬまの池。はらのいけ、たまもはなかりそといひけんもをかし。ますだの池。

は當らずやと、答へま欲しかりし。奈良の猿澤の池は、時の帝の寵愛衰へたる采女が、其の身を嘲ちて入水したりしを、帝聞こしめして、此の池に行幸あらせられたるなど、世に名高く聞えたる池なり。此の時、帝哀ませ給ひて、御供に侍りし柿本人麿に、歌を詠ませ給ひければ、「わきもこが、ねくたれ髪を、さる澤の、池の玉藻と、見るぞ悲しき」と人麿の詠みたるは、亂れたる髪の池に浮きたるが、玉の藻とも見らるるを悲めるなれど、今此處には、斯る事まで言ふにも及ばず。御前の池、之は如何なる心にて付けたる名ならん。



【廿三】 せちは

五月にしくはなし。さうぶ

鏡の池。狹山の池、之は古今六帖に、「武藏なる、狹山の池の、みくりこそ、ひけばたえすれ、われやたえする」とありて、三稜草と言へる此の歌の面白ければ、世に知られたる池なるべし。鯉沼の池。原の池、之は風俗歌の詞に「をし。たかべ、鴨さへ來居る原の池の沈鳧 刈 鴨 老藻 菅根 や、玉藻はまねかりそ、おいもすがねや、まねかりそや」とありて、玉藻を刈るべからず と言へるも面白し。此の原の池は、攝津にあり。增田の池は、大和にあり。皆世に名高し。

【廿三】 節は

五月五日の節句に若くものはなし。菖蒲、蓬

よもぎなどの、かをりあひたるも、いみじうをかし。こゝのへの内をはじめて、いひしらぬたみのすみかまで、いかでわがもとにしげくふかんと、ふきわたしたる、猶いとめづらしく、いつかことをりは、さはしたりし。そらのけしきのくもりわたりたるに、きさいのみやなどには、ぬひどのより御くすだまとて、いろ〳〵の糸をくみさげて、まゐらせたれば、みちやうたてまつるもやの柱の左右につけたり。

なごの芳香を放ち競ふも、殊に可笑しく、九重の雲深き處、天皇菖蒲の蔓を着け給ひて、武德殿に行幸あり、騎射走馬を御覽ぜられ、内外の群臣も亦た皆菖蒲の蔓を着け、上は禁中より、下は數ならぬ民家まで、今日は各々菖蒲蓬を多く軒に葺き渡したるは、毎年の例ながらも猶ほ最と珍らしく、端午の節句の外に、何時かは斯る儀式を行ひたりや。五月雨の時節なれど幸に降りもせで、唯だ空の曇り渡りたる程にて、中宮の御局などへは、縫殿より藥玉とて、菖蒲を丸めて玉としたるに、いろ〳〵の造花を付け、五色の絲の組みたる



九月九日の菊を、あやとすゝしのきぬにつゝみて、まゐらせたる。おなじはしらにゆひつけて、月比あるくすだま、とりかへてすつめる。又くすだまは、菊のをりまであるべきにやあらん。されどそれはみないとゝ引とりて、物ゆひなどして、しばしもなし。

御せくまゐり、わかき人々を長く垂げて進らすれば、御几帳立てまつる母屋の柱の右左に、其の藥玉を懸けらるるなり。

九月九日の菊の節句には、菊の花を綾と羅の絹に包みて進らすれば、藥玉を懸けたる同じ柱に結ひつけて、五月以來の藥玉は、此の時始めて取り捨つるなれば、菊の節句までも其の儘にしてあるなり。されど藥玉に垂げたる五色の絲は、既に引き取りて、物を結ひなどするなれば、端午の節句の後、暫時の間も其の儘には殘されざるなり。

さても端午の節句の祝儀詣でには、若き女子

は、さうぶのさしぐしさし、ものいみつけなどして、さまゞからきぬ、かざみ、ながきれ、をかしきをりえだども、むらごのくみして、むすびつけなどしたる、めづらしういふべき事なられど、いとをかし。さて春ごとにさくとて、櫻をよろしうおもふ人やはある。つぢありくわらはべの、ほどゞにつけては、いみしきわざしたると、つれにたもとをまもり、人に見くらべ、えもいはずけうありと思ひたるを、そばへたるこどれりわらはなどに、ひきさら

達は、刺櫛に菖蒲を飾り、物忌の札など付けたるもありて、婦人の禮服の上着の唐衣、若くは汗衫に、菖蒲の長き根、又は藥玉の飾なる面白き造花などを、薄き濃き色の一樣ならぬ組糸にて結び付けたるは、毎年の事にて、今更ら珍らしく言ふべきことならねど、春毎に咲く櫻を賞づると同じ心なり。さて十字の街を遊び歩く童女の、其の身分相應なる藥玉を持ちて、悅び樂めるもあり。或は我が袂に付けたる藥玉を見守りては、人の藥玉と見較べなどして、限りなく嬉しげに興じけるを、小舍人童男などの惡戲に、其の下げるた五色



れてなくもをかし。むらさきのかみにあふちの花、あをきかみにさうふの葉、ほそうまきてひきゆひ、又白き紙をれにして、ゆひたるもをかし。いとながきれなど、文のなかにいれなどしたる人どもなども、いとえんなる。返り事かゝんといひあはせ、かたらふごちは、見せかはしなどするをかし。人のむすめ、やんごとなき所々に、御文きこえ給ふ人も、けふは心ことにぞなまめかしうをかしき。夕ぐれのほどに、郭公の名のりしたるも、すべてをかの組絲を引き取られて、泣くもあるは面白し。又た紫の紙に、旃檀樹の薄紫の花を包み、青き紙に、菖蒲の青き葉を包みて、細く卷きて引き結び、或は白き紙を、菖蒲の根のやうに作りて結びたるも面白く、人よりの文の中に、菖蒲の長き根を入れて寄來せしも、最と艶に優しければ、善き返事せんものと、會心の友と申し合せ、互に返事の文を見せ交はしなどするも面白し。或は人の娘の許へ、或は高貴なる方々へ、文遣り給ふ人も、今日端午の節句には、取り分けて婀娜しく美しくて、面白く見ゆるなり。殊に夕暮の頃、郭公の一聲を

しういみし。」

【廿四】木は

かつち。ごえふ。かき。たちばな。」そはの木、はしたなきこゝちすれども、花の木どもちりはてゝ、おしなべたるみどりになりたる中に、時もわかずこきもみちのつやめきて、おもひかけぬあを葉の中より、さし出たるめづらし。」まゆみ、さらにもいはず。」そのものともなけれど、やどり木といふ名いとあはれなり。さかき。臨時のまつり、御神樂のをりなど、いとをかし。

聞くなど、一つとして可笑からぬはなし。

【廿四】木は

桂○五葉の松○柿○橘○そばの木。此のそばの木は何の情趣もなけれど、樹々の花皆散り果てゝ、見渡す限り青葉なす中に、時をも擇ばず濃き紅葉する若葉の艶々しく、思ひかけもなう萬緑叢中に紅一点を差し出せるは、最と珍らし。檀は、今更言ふ迄もなく好し。寄生木は、何れの木と言ふこともなく一定せざれど、寄生と言ふ名は面白し。眞賢木は、賀茂八幡の臨時祭、内侍所の御神樂の折などに用ひられ、世に種々の木あるが中に、殊に神



よに木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけんも、とりわきをかし。」くすの木は、こだちおほかる所にも、ことにまじらひたてらず、おごろ〳〵しきおもひやりなどうとましきを、ちえにわかれて、こひする人のためしにいはれたるぞ、たれかはかずをしりて、いひはじめけんとおもふにをかし。」ひの木。人ぢかからぬ物なれど、みつばよつばの、とのづくりもをかし。五月に雨のこゑまれぶらんもをかし。」かへでの木。さゝやかなるにも、もえ出た

前の木と語り傳へらるるは面白し。楠の木は、樹木密生の中には雜り立たず、己れ獨り鬱蒼として其の枝を蔓らせるを、仰々しき思遣りに喩ふるなど、感心も出來がたく、戀する人の千々に思を碎くを、楠の木の千枝に別れたるに比ぶるなど、誰か其の數を算へ知りて、千枝などと言ひ始めけんも可笑し。檜は、深山にある木なれど、建築の良材なれば、三棟四棟の殿造りに用ひられたるも面白く、五月の頃新芽を吹き出せば、風に鳴りて、雨の音するも可笑し。楓の木は、たとひ小き木にても、萌え出でたる梢の若芽の赤みて、其の若芽

るこずゑのあかみて、おなじかたにさしひろごりたる葉のさま、花もいと物はかなげにて、むしなどのかれたるやうにてをかし。」あすはひの木。此世ちかくも見えきこえず。みだけにまうでゝかへる人などしか、もてありくめる。枝ざしなどの、いと手ふれにくげにあら〳〵しけれど、何の心ありて、あすはひの木とつけけん、あぢきなきかれことなりや、たれにたのめたるにかあらんとおもふに、しらまほしうをかし。」れずもちの木。人なみ〳〵なるべと同じ方向に差し廣りたる葉の狀も面白く、其の花は、虫の死に枯れたるやうにて墓なきが可笑し」羅漢柏の木は、常には檜葉とも言ふ。明日は檜に爲らむとの意に通ふ名のものなるが、深山などに生ひ茂りて、都近くには見聞すること少し。吉野の金峯山に參詣して歸る人などの、土産に持ち來るものにて、枝などの手觸り荒らきものなれど、如何なる心ありてか、明日は檜にならんなどと名付けたるにや。或は無益なる豫言に過ぎざるにや。將た又た誰に賴みて、明日は檜になるならんかと、聞き知らま欲しうて可笑し。鼠梓木は、



きさまにもあられど、葉のいみしうこまかにちひさきが、をかしきなり。」あふちの木。やまなしの木。椎の木は、ときは木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるもをかし。しらかしなどいふもの、ましてみやま木の中にも、いとけどほくて、三位二位のうへのきぬそむるをりばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めてたきこと、をかしき事にとりいづべくもあられど、いつとなく雪のふりたるに見まがへられて、そさのをみことのいづ鼠と言ふ名よりしても、人並ならぬものなれど、其の葉の殊に小さく細きが面白し。樗即ち旃檀樹、山梨の木、椎の木も好し。殊に椎の木は、多くある常盤木の中にも、「いつとなく葉がへぬ山の椎柴に人の心をなすよしもかな」と堀河百首に見えたる如く、四季落葉せざる例に引かるゝも可笑し。栃の木は、深山木の中にても、殊に人氣遠き所にあるものにて、二位三位の人の袍を栃染にする時のみ、其の葉を見るに過ぎず。固より芽出たく優れたる事、面白き事などの例に引かるゝものならねど、白樫と言へる名に依りて、四時雪の

もの國におはしける御事を、おもひて、人丸がよみたる哥などを見る、いみじうあはれや。いふ事にても、をりにつけても、ひとふしあはれとも、をかしとも、きゝおきつる物は、草も木も鳥むしも、おろかにこそおぼえれ。」ゆづりはのいみじうふさやかにつやめきたるは、いとあをうきよげなるに、おもひかけずにるべくもあらず、くきのあかうきら〳〵しう見えたるこそ、いやしけれどもをかしけれ。なべての月ごろは露も見えぬ物の、しばすのつごもりにしもときめきて、なき人のくひ物にもしくにやとあはれなるに、又よはひのぶるはがためのぐにもして、つかひためるはいかなるにか、紅葉せん世やといひたるもたのもし。かしは木、いとをかし。はもりの神のますらんもいとかしこし。兵衛のすけそうなどをいふらんもをかし。すかたなけれど、すろの木からめきて、わろき家のものとは見えず。」

降りたるに見まがへらるゝも可笑しく、素盞嗚尊が出雲に在しける當時を想ひ察して、柿本人丸が「足引の山路も知らずしら樫の枝にも葉にも雪のふれゝば」と詠みたる歌を見るなど面白し。すべて世に傳ふる事にても、四季折々の景色につけても、格別に哀れども面白しとも聞き置きたる物は、たとひ草にせよ木にせよ、或は鳥虫にもせよ、善く記臆し居て忘れぬものなれば、人丸も亦た此の歌をこそ詠みたるなれ。楪は、其の葉房々しく艶めきて、最と青く清げなるには、他に似たる木もあらず、若し似たるものあらば、そは思ひ



も懸けぬ事どもなり。其の莖は赤くて煌々しう見えたるは、下卑たれども亦た面白味ありて、平常は少しも人の用ひざるものなれど、十二月晦日に至りて世に時めき、亡き人の靈祭に、其の供物の敷物に用ひられ、又た正月の儀式に、延命長壽の爲めの齒固めの供を盛る臺の上にも敷かれて、重寶がらるゝは如何なる故にや。父子代々相讓ると言ふに因みたる心にもやあらんか、「新撰六帖に、旅人に宿かすが野のゆづり葉の紅葉せん世や君を忘れん」とありて、楪の紅葉する時なければ、長へに君を忘れずと言へる心に懸けたるも、賴もしか

【廿五】 鳥は

こととところの物なれど、あふむいとあはれ也、人のいふらんことをまれぶらんよ。郭公。くひな。しぎ。

らずや、柏木も最と可笑し。後撰集に、「柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるなとありて」、葉守の神は樹の神なるに總ての樹を守るにはあらで、唯だ柏木のみを守り在すと言ふも畏こく、兵衛佐、兵衛尉などを、柏木と言ふも亦た面白し。櫻桂の木は、枝もなくて愛嬌なき姿なれど、何となく唐土の木めきて、賤しき家に植うる木とも見えず。

【廿五】 鳥は

鸚鵡は、素と支那西域の産にて、我國固有の鳥ならねど、最と愛らしきものなり。禮記にも鸚鵡態く言ふとあるが如く、人語を眞似ることを妙なり。郭公、水鷄、鳴、みこ鳥は通俗に椋鳥、鵐なども愛らし。鷃は、夫木集に寂蓮の詠める、「おもひかね柴折りくぶる山里をなほさびしとや鷃鳴くなり」。又た源師光が「百敷にすみか定めよひたき鳥なれるやとりも庭に見ゆめり」と詠みたるも面白し。山鳥は、友を慕ひて鳴くなれば、「山鳥の、尾ろの極尾に、鏡かけ、となふべみこそ、なにまうりけめ」と古歌に見えたる如く、鏡を見せたれば、己が姿を友と思ひて、心慰むるも可笑し。されど夜は雌雄互に谷を距てゝ臥す鳥なれば、一人淋しき閨など思はれて心苦し。鶴



みこ鳥。ひわ。ひたき。山ごりは友をこひてなくに、かゞみを見せたればなぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、いとこゝろぐるし。つるはこちたきさまなれども、なくこゑ雲ゐまできこゆらん、いとめてたし。かしらあかきすゞめ。いかるがのをどり。たくみどり。さぎは、いと見るめもみぐるし。まなこゐなどもうたて、よろづになつかしかられど、ゆるぎのもりにひとりはなじゐ、あらそふらんこそをかしけれ。」

は見目善き姿ならねど、九皐に鳴きて聲天に聞ゆと言はるゝ如く、雲井にまでも鳴く聲の聞ゆるは芽出たし。頭赤き雀、斑鳩の雄鳥、巧婦鳥一名鷦鷯なども愛らし。鷺は見苦しき姿して、其の眼の黒きも快からず、一として懷かしき所なけれど、新撰六帖に、「たかしまや万木の森の鷺すらも獨りは寢じとあらそふものを」とありて、夜は棲む林に歸りて、百千の群をなして宿るこそ可笑しけれ。此の歌の万木の森は、近江にあり。

はこ鳥も可笑し。水禽にては、鴛鴦こそ愛らしけれ。六帖に、「はねの上の霜打ちはらふ友ばこどり。水とりは、をしいとあはれなり。かたみに



ぬかはりて、はねのうへの霜をはらふらんなどいとをかし。みやこどり。川ちどりは、友まどはすらんこそ。かりのこゑは、さほくきこえたるあはれなり。かもは、はねの霜っちはらふらんとおもふにをかし。」

をなみ鴛鴦の獨寢するぞわびしき」と見えて、雌雄互に居交りて、冬の朝羽の霜を拂ふなど、最と可笑し。都鳥は全身白く、背と脛とは赤くて面白し。川千鳥は、拾遺集に、「夕ざれば佐保の河邊の川霧に友まどはせる千鳥なくなり」と見えて、友まどはせるまでも群れ居るさまの、哀れに可笑しく、雁の聲は、遠くかすかに聞ゆるが興あり。鴨は冬になりて池に棲み、氷れる水に夢を結びて、羽に置く霜を打ち拂ふならんと思へば、最と可笑しく、後撰集に、「冬の池の鴨の上毛に置く霜の消えて物思ふ比にもあるかな」とあるをも思ひ出ら